

神の一手を極める者

義藤菊輝@惰眠を貪るの回？

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

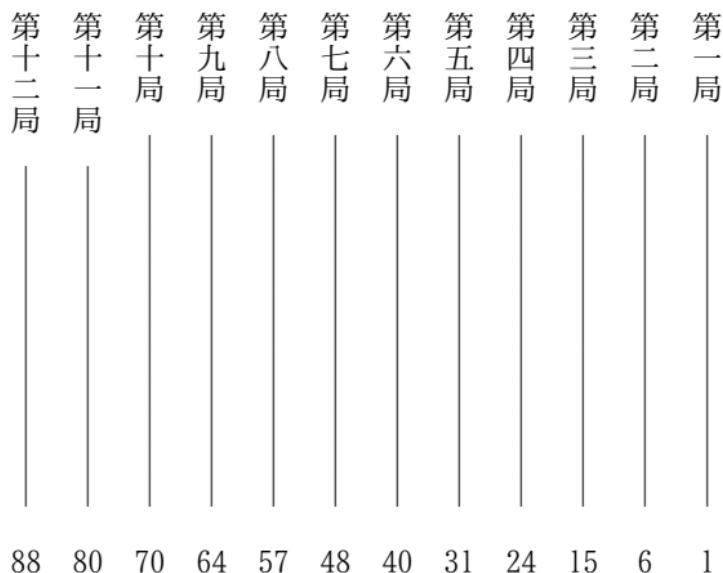
史上最年少で、桑原本因坊からタイトルを獲得したヒカルが、気付いたら小六に戻つ  
ていた話。

コンセプトとしては、虎次郎のことしか見えない逆行ヒカルが、逆行佐為しか見えな  
いあかりと一緒に、ストーカー塔矢や変態ヤンキー緒方と共に神の一手を極めようとす  
る話です。

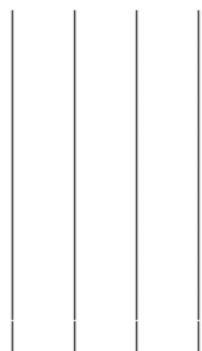
pixivで書いてましたが、こつちに転載しました。

目

次



第十三局  
第十四局  
第十五局  
第十六局





# 第一局

日本棋院の中にある幽玄の間は、獨特の緊張感に包まれていた。それもそのはずで、これから始まる対局は囲碁の中でも取り分け高い位置づけである本因坊を決める戦いの最終戦であるから。

現本因坊と挑戦者2人によるたつての希望で、この試合だけ旅館ではなく日本棋院の中で、さらに封じ手制の2日による対局ではなく一日の試合で行われるこの試合に、国内外の囲碁ファンはネット中継の画面に齧り付いているという。

そんな中、川端康成が書いた『深奥幽玄』の掛け軸が包み込む二人だけの世界には既に対局者である二人の棋士が席に着いていた。

一人は、進退を繰り返しながらもしぶとくこの座に座り続いている現本因坊の桑原。今まで以上に曲がった腰つきは彼が相当な高齢であることを示しているが、それでも彼を侮る人は誰一人としていない。それは、対戦者であり挑戦者でもある進藤ヒカルもうようである。

よくスーツに着られているとヤジを受けていた幼いヒカルは消え、今では手に持つ扇子が彼の持つ印象の一つになつた二十歳手前の青年は黄色に輝く前髪の下で静かな火

を灯していた。

(佐為。秀策。とにかく全力で打つよ。俺の碁を見とけよ？ 絶対に勝つから)

対局前にヒカルは、「師匠の碁を証明する」と言っていたが、自分をこの場に導くきっかけになつたかけがえのないただ一人の師匠と、顔も形も声も分からぬ唯一の兄弟子に声にならない声でそう言うと、本因坊戦の第七戦。タイトルを賭けた最後の試合開始の合図を耳に入れた。

一手目は絶対に一つ。右上スミ小目。

気がつけば進藤ヒカルの碁碁にとつて代名詞ともなつてゐる一手が、パチッと気持ち良い音を鳴らして碁盤の上に置かれた。現代のコミ制度においてはいい手とはされない秀策の小スミとは少し違い、地盤を固めることに重きを置いた秀策の小スミに対して攻めに重きを置いた形。

牛角に上手く溶け合わせたその手法は応用も広く。攻め、守り、凌ぎ、抑え。色々なものに使え、模様の展開もしやすい。ヒカルをこの場所まで連れてきた、ヒカルの形だ。

最強の初段と持て囃されたあの時期から考えるとサボらなければもつと早くに辿り着けたはずのこの場所。

若さという物は恐いの。だなんて心にもないことを呟きながら、じつくりと腰を据えて自分の模様を広げようとする桑原は、いつものように若者をおちよくるように場面を崩しにかからない。今では全盛期だなんて呼ばれていた10年20年前のようにはつきりと石を置いていく。

緊張していることなど、気負っていることなど、そんなことはヒカル自身がしつかりと分かつていた。

この試合を落とせば、この試合に挑むまでまた1年間我慢しなければならない。自分を育ててくれた佐為の碁を見せ付けられる試合が、伝えられる試合が遠くなる。

そう思う度に扇子を握る手に力が入り骨である竹が悲鳴をならしている。その音がじぶんに落ち着けと注意している。

パチッ。パチッと打たれる試合は、最初の一手から約三時間が過ぎた。

対局は既に大ヨセが始まってしまい、細かい部分の攻防が多くつた対局は、引退した塔矢行洋や緒方たち高段位の観戦者でさえも勝敗が分からぬ難しい局面になっていた。

碁盤の上で同じ模様が幾つもの数並べられた観戦室で検討しながら対局を見ていた、アキラや伊角、和谷に緒方、倉田たちは、あーだこーだと自分の主張や予測を言い合い

ながら、ヒカルの勝利を応援していた。

河童のようにてつぺんだけ禿げていた頭をポリポリと搔く桑原は碁笥に掛けていたその右手をゆっくりと肘置きに置いた。

持ち時間は1人8時間。普段であればじっくり考える場面が多い試合であるはずだが、ヒカルにしろ桑原にしろ持ち時間はこれでもかと言うほどに余っている。年老いているのにも関わらず最後まで打ち続けた桑原は満足そうな声で、

「これで、終局か」

そう言つた。

それに対してもヒカルは、か細い声でうん。と、泣きながら頷いた。

「坊主。よくやつた。お主は、お主に碁を教えた者はわしが覚えた。この一局で、数多くの棋士が驚く。お主は、お主の師匠に代わり、お前が教わったときの様に、教えてやれ」

「ありがとう。桑原のじーちゃん。師匠も、兄弟子も、喜んでると思う。ありがとう」

ヒカルの頬には2つの涙の線があつた。しかし、上げられた顔は最高の笑顔。

「進藤ヒカル七段の二半目勝ちで、今期本因坊戦を終了します」

アナウンスと共に、観戦室で見ていたメンバーが、ヒカルのところに駆けてやつて来た。

そして、ヒカルと一緒に泣きながらはしゃぐ。おめでとうとアキラが、勝つたなど伊角が、すげえよと和谷が、色々な言葉の雨が降り注ぐ。

そんな中、

「そう言えば、ヒカル。お主には師匠がいなかつたのでは？」

そう気づけばヒカルと呼ぶようになつた桑原が尋ねた。それもそのはず、ヒカルは師匠がいない身で2年という短い期間でプロ棋士になつたという筋書きがある。

「いるよ。そいつの名前は藤原佐為。俺の師匠であり目標であり信頼する親友。最強のネット棋士 sai だ。因みに、兄弟子は本因坊秀策」

何を言つて。という顔をする緒方に、舌を出して挑発する。

その時だつた。

ヒカルは、意識を飛ばし世界が暗転した。

## 第二局

国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた。なんて有名な物語の冒頭があるが、まさに、睡眠という長いトンネルを抜けてヒカルは目を覚ました。  
見慣れた天井。駆け寄つてくる良きライバルや記者たちが焚くフラッシュ等の騒音が一つとして無く、ヒカルは、今自分が自宅にいることを言外に伝えられていた。  
状況が飲み込めない。

先ほどまで本因坊であつた桑原と対局していたはず。それだとどうのにも関わらず、今自分が居るのは、これまで18年間もの間住み続いている自室。ただ、何かが違う。

普段であれば、所々生活のクセが着いて居るはずの所。じーちゃんに買つて貰つた大切な碁盤を置いていた場所には、棋士であることを示すように碁盤と碁石たち置かれているはずだし、あたりに散乱していたはずの多くの名局と呼ばれる棋戦の棋譜が全くない。

いつの間に家に帰つたんだろ。とかいう次元の問題ではない気がした。だつて、桑原のじーちゃんと打つたあの碁は、しつかりと頭の中に入つてゐるから。

そんな時だつた。自分の母である進藤美津子からの声が聞こえたのは。

「ヒカル？ 全くもういつまで寝てるの！ あかりちゃんが迎えに来たわよ」

あかりが？ 珍しいな。そう思つた理由は簡単で、葉瀬中の囲碁部を辞めて院生。そしてプロ棋士へと進んでいく過程で、中学を卒業した時点で学業はしなくなり、高校に行かなかつたことで幼馴染みであるあかりとは疎遠になつていたからだ。

それでも、母に呼ばれて返事をしない子供は居ない。間の抜けた「はうい」という返事を返したとき、ヒカルは、自分の返事に違和感を覚えた。

それは、普段慣れているいつもの声が少しばかり高かつたからだ。対局後で熱でもあるのか？ 何て思つたりもしたが、取り敢えず待たせるのは悪い。身体を横に倒して部屋の中を見ていたヒカルはベッドから抜け出す。

あれ、可笑しい。いつもと目線が違すぎる。小学校位の時の目線じゃないか？

違和感は瞬間に脳内を駆け巡り、特に考えもせぬクローゼットの中身を急いで引つ張り出すにいたる。すると、少し見覚えのある服ばかり。

胸元に大きく『GO』とプリントされている子供服を手に取つた自分は、階段の下に居るであろう美津子に向かつて大声を出す。

「母さん！ 今日つて何年の何日？」

「何言つてるの？ 1998年の12月×日でしようが。こんなんじやまた遅刻するわ

よ?、早くしなさい」

明確に可笑しいこの日付に違和感を唱えるのはどうやら後の方が良いと直感で理解した俺は、今日の日に使われる教科書とノートをボロボロのランドセルの中に入れ、はい。と元気良く返事すると、しつかりとランドセルを背負い、玄関へと走る。

「おはよう。ヒカル」

「おはよう。あかり。母さんありがとうございます」

ヒカルは、美津子にそう言うと、あかりの手を握り、走つて学校へと向かっていった。



「どうしたの? ヒカル。今日はいつもより優しいけど」

懐かしき小学校への道のりの途中、走らなくとも間に合うであろう位置まで来た俺に、手を繋いだままのあかりはそう尋ねる。

「ん? ああ。良いことがあつたんだよ」

「それってどんなことなの? 私にも教えて」

。どうしようか。この状況から察するに2つのパターンがある。一つは、未来の世界から過去へと戻ってきたパターン。それなら、碁盤や棋譜がないこの状況が小六の時代に巻き戻つたと説明しても理解できる。また、夢の中で自分の未来を疑似体験したと

いうパターンも考えられるが、どちらにしろ非現実なことだ。

ただ明確に思うのは、記憶の中にある前——若しくは体験——とは違う、ダメだつたことを更正したい。前は至らなかつたこと。たとえばあかりに対しての扱いとか。

「良いことつていつても、夢なんだけどな。幸せな夢だつたんだ」

「ふくん。どんなの？」

「えつとな、俺とあかりが二十歳になつたら結婚する夢」

全く以て嘘の内容であるものの、恥ずかしいなどということは全く顔に出さず、そう言うと、あかりはモジモジし始めた。俯いているため、どんな表情をしているか分からないが、あかりの耳が真っ赤になつていることだけはわかる。

「あかり。俺たちが二十歳になつたら、結婚しような」

キヤー。と、頭から湯気を出し始めたあかりは、最終的に校門の前で糸の切れたマリオネットのように倒れた。

◆◆◆◆◆◆◆◆

大丈夫かあかり。心配したんだぞ？

あかりが目を覚ますと、右横からヒカルのそんな声が聞こえてきた。

フカフカのベッドとカーテンによる間仕切り、保健室に連れてきてくれたのがヒカルだと想像すると少しばかり顔に熱が籠もっていくのが理解できた。

今から俺が倒れるかもしれないのに、お前に倒れられたらどうするんだよ。叫び出しそうな気持ちの中、ヒカルがどういう意味で言っているのか、あかりには分からなかつたが、心配してくれているのだけはは分かる。

「昼休みがそろそろ終わる。動けるか？」

「うん。大丈夫」

あかりが起き上るとヒカルが手をしっかりと握り、そのままヒカルが保健室の先生に礼を伝えると、ガヤガヤと人が溢れかえった廊下を進み教室へと向かう。

あかりの隣に座つているヒカルは、机の中に入つてあるノートを出すと、そこには「藤崎あかり」と自分の名前があつた。

「ノート書いてやつたから。後で見直せよ」

ヒマワリのように綺麗な前髪が、太陽の光を受けて、綺麗に輝く。あかりは、ありがとう。と抱きついた。



退屈な授業が続く中、ヒカルは今日の日付に違和感を感じていた。小学6年の冬。といふと、それは佐為と出会つた季節のこと。

試してみるか。

「あかり、今からじ一ちゃんの家に行くんだけど、来る？」

「行く！」

終礼も終わり、各々が好き勝手な放課後を楽しむために殆ど人が居なくなつた教室で何気なくそう聞くと、あかりは驚くことにノータイムで返事した。そんなことに軽口でバカだなあ。なんて言い和む。

前——と思わしきもの——とは違うあかりとの関わり合いに心地よくなりながら、家に帰る道ではなく祖父である進藤平八の家に向かう道を進んでいく。

「そう言えば、何で急にヒカルのお祖父ちゃんの家にいくの？」

「うん。尤もな質問……。えつとな？　俺のじーちゃんが囲碁つて奴やつてるのは知つてる？」

「うん。五目並べとかする奴でしょ？」

それ覚えたんだ。何て照れながら伝える。

「じじくさいからつて馬鹿にしてたんだけどやり始めてみたら面白くてさ、確かじーちゃんの倉に良い碁盤があつたとおもうからさつと、着いた。じーちゃん！　遊びに來たよ！」

ヒカルは、玄関に出てきた祖父に、あかりに飲み物をあげて。と言うと、直ぐ様鍵を貰い倉へ向かつた。

この世界が過去の世界であるにしろ、自分が未来の夢を見たにしろ、これから会うで

あろう人は、自分のことなど何も知らない佐為。そうであれば、あの楽しい時間をまた一緒に遊べると思えば良い。

古い倉の錠を外し、相変わらず埃っぽい倉の中へと入る。倉独特の雰囲気や臭いに懐かしさと氣道をくすぐる埃っぽさに、ゲホッ。と嘆せるが、そんなことはどうでもいい。

ヒカルは夢中になつて階段をかけ上がると、あの、碁盤の前で止まつた。

「ヒカル？ 怪我しないでよ」

じ一ちゃんに見てきてとでも言われたのか、お化けが出そと怖がつてゐるあかりに手を差し出し、階段を登らせる。

「この白いのが言つてた碁盤？ て言う奴？」

「そうそう碁盤。布が被つてるけど」

白い布で覆われた碁盤。ここに、流行病で亡くなつた本因坊秀策の血のシミがあれば、佐為がいる。

「頼むぞ。佐為」

ヒカルは、願うような気持ちで、布を捲つた。目的の血痕があることを願つて。

「なんだろうこの、誰かが泣いたような跡みたいな、濡れた跡」

先に碁盤を覗き込んだのはあかりで、先に声を出したのもあかりだつた。

「ん？ 何言つてんだよ。あるのは血のシミだろ」

そんな訳ない。見えるのは碁盤の端に見える血のシミだけ。濡れた跡だなんて全く解らない。首を傾げて考えている。その際中に、急にあかりが立ち上がり、誰か居るの？ とそう辺りをキヨロキヨロと見る。だが、二人がいるのは藏の中だし、家に居るのも祖父だけ。

「え？ お化け？」

怯えきつたあかりの表情から、佐為があかりの前にいることが解る。そして、佐為があかりを選んだことも。あの喜ぶ顔を笑顔を俺は見れないのか？ あの喜怒哀楽を大いに孕んだ心地良い声を聞くことは出来ないのか。そう思うと、とにかくつらい。

——おお、あまねく神に感謝します。

ふざけるな。あの楽しかったときの俺たちはどうなるんだよ。

——私は再び、囲碁を打てる。

俺とお前は一心同体じやなかつたのか？ 俺と打つのは、もう嫌なのかな？

「あつ！」

佐為が精神の中に入つたのか、今朝と同じく糸の切れた操り人形に倒れ込むあかりを急いで抱きしめると、ほつと一息つく。

心の中はぐちやぐちやだ。あの未来の世界を辿れると。あの楽しそうな夢を体験できると。そう思つていた矢先。

——ようやつたな。少年。

聞いたことのない声が聞こえてきた。まさか。ヒカルは、碁盤を見た。  
碁盤の向こう側。血のシミが見える下手側には、よくテレビ番組で見るようなお坊さんの服装をした青年。

——女子の危機を救つて、その男の子。ようやつた。

「まさか、虎次郎？」 本因坊 秀策

——僕のことを知つているのか？

知つてるも何も、俺の兄弟子。師匠の姿は以前俺の目には見えないがそれでも心強い。

「知つてる。江戸時代御城碁でその才能を遺憾なく発揮した最強の棋士。一心同体の棋士だ」

どうやら前とは違い、今回は棋聖が二人も降臨したらしい。

## 第三局

床の上に倒れそうになつた寸前の所であかりを抱きしめることが出来た俺は、「記憶の中だと、俺が倒れて病院に運ばれたんだよなあ」なんて考えていた。緊急時に考えることではないが、この状況から考へるに、俺には本因坊秀策、あかりには藤原佐為が藏の中にあつたこの碁盤を介して宿つた。そう考へるのが自然だろう。

なぜ佐為が自分に宿らなかつたのか、なぜ佐為の姿を見ることが、声を聞くことが出来なくなつたのか分からぬが事実は変わらない。現に、俺には碁盤の向こう側で優しく微笑んでいる本因坊秀策こと虎次郎の姿しか視界に捉えられない。佐為とまた一緒に碁を打つことが出来ないのはシヨツクだが、それよりも今重要なことは、倒れたままのあかりのことだ。

俺とあかりは今小学校6年生。いくら大人に比べて小さく、さらに女の子といえども、子どもは男児よりも女児の方が先に成長していく。ゆえにあかりの体は俺のそれよりも少しばかりか大きい。何が言いたいのかというと単純なことで、俺一人だけの力だけじゃあ、あかりをこの藏の中から外に出してあげれないと言うこと。

今頃、自分の部屋の中で詰め碁の本を開き、碁盤に向かつてウーンウーンと唸りながら

ら答えを考えているであろうじーちゃんを呼んできて、あかりを運んで貰つても良いのではあるが、俺の場合であれば進藤家の問題として済むものの、藤崎家にまで跨がる大きな問題になつてしまふ。世間体なんてモノは気にしないが、あかりが倒れてしまつた原因が佐為にあるのだとしたら、俺の経験から考えると病院など時間の無駄だ。意味も無く病院に行つてもお金の無駄になるだけ。

それなら、このままあかりを抱きしめたまま、ゆつくりと寝かせておく方が良いし、本当に佐為があかりに宿つたのなら、それを確認した方がこれからのことに関係していく。頭の中にある未来の自分のことから考えても、俺には囲碁を打つことしか能力が無いわけだし、そこでしか自分を表現するモノはない。棋士になるには“佐為”と言う存在はかなり大きく関わる。なにしろ、俺の頭にある囲碁の基礎は、佐為が築いてくれた物だから。

(あ、えつと……俺の名前は進藤ヒカル。それで、どう呼べば良い？　お前のこと)

[そうですね、僕のことでしたらお好きなようにお呼び下さい。本因坊秀策でも、虎次郎でも。君は僕のことを知っているのでしょうか？】

(知ってるよ。確かにしつかりと知つてゐる。なんでかは後々ちゃんと説明するけど、お前は俺にとつて意義ある存在だよ……)

ただ、それより、

——この場所に佐為は、藤原佐為は居るのか？

もし、この場に佐為が居るのならば、声を聞かれたくない。自分があの優しい声を聞くことができないのに、佐為だけが聞けるだなんて嫌だ。そんなあやふやな気持ちが表れているのか、虎次郎に尋ねた声は、佐為に話しかけていたように心の中で、さらに不安を孕んだ弱々しいそれは、口に出されていたら、きっと空気に溶けてすぐに消えていただろう。そして、それに虎次郎は首を傾げる。

「なに呆けたことを言つてるのでですか？」佐為でしたら、いま貴方の前に居るではありますか。貴方の腕で眠る女子の向こう側に、きちんと居るではありませんか」

なに可笑しなことを言つて。と笑う虎次郎とは違い、俺の気持ちは底なし沼にゆつくりと飲み込まれていくかのように沈んでいく。この中で、佐為の姿を見ることができないのは——おそらく——俺だけ。あかりには、あの烏帽子や黒い長髪。白い狩衣すの佐為が見えるだろう。

「どうしようも無いか……」

すべてはあかりが目覚めてから。そう結論づけた俺は、暗い気持ちを全て押し込めるように、あかりの体をきつく抱きしめた。

◆◆◆◆◆◆◆◆

果てしなく続く階段を、1段ずつただひたすら上つているような感覚があつた。この

先に一体なにがあるかは皆目見当も付かないが、どんなところであれただ一人で進んできたが、それが悪いこととは露ほども思つていなかつた。

平安の世で打つた一打一局。江戸の世で打つた一打一局。その全てで私は、自分の碁に必要なもの身につけてきた。たとえそれが私よりも棋力の低い者からのものであつても。アゲハマによる不正から来た動搖が原因で負けたあの一局の悔しさ。涙で濡らした碁盤に、死靈として取り憑き、平安の時から時代を超えた江戸でも、私という存在はただ一つ。ただ一つの心のみで存在した。もつと碁を打ち、強くなりたいと。虎次郎の短い人生を奪い、己を神の一手だなんてあるか分からぬものを探して、一人ぼつちで。

違つた。

彼の眼前から消えるとき、当たり前のことに気がついた。

碁は一人だけで打つことなどできない。あの二人のように、互いのことを意識して競い合い、高め合うことが可能な存在がいなければならぬことに、ともに知識を共有し、笑い合える仲間がいる。私にとつてのそれが。

これから私はどうなつていくのだろう。小さな暗闇の中。目を閉じれば、決して短くない三年間の思い出が次々に溢れ出てくる。拙い手つきで石を持ち始めた彼。負けて悔しがる彼。勝つて喜ぶ彼。何気ない日常の会話や、その日あつた対局の会話。その全

てが楽しく輝く宝物。だから、

「神よ。欲深くも愚かなこの私を、再び、どうか再びヒカルの元へ。私は、彼と共に碁を打ちたい」

思えば、私が初めてあの者と打つた日に、彼の才能の片鱗が見えていた。あの一手は決して好手なんて呼べるものはなかつた。どちらかというと悪手と言つて良い。直感で感じられる未来を打つ手は、あの日、本気で戦つたあの一局で開花した。彼が言つていたが、正にその通り。

縦と横に19の線が引かれた世界の中、煌めく9つの星を中心にして、自分と相手で多くの星々を生み出し、新たな宇宙を創造する。

私は彼と、

「進藤ヒカルと2人で、盤上に壮大な宇宙を創りたい」

神の一手。それがどのようなものなど全く解らないが、2人でその一手を求めたい。

「あまねく神よ。どうか私に今一度、今一度機会を……」

声がした気がした。それも聞き覚えのある2つの声。かわいらしい男の子と、女の子の声。それを認識した途端、私の体が引っ張られ、汚れた沼のような闇から脱け出していく。

「血痕ではなく、涙のシミが見えるのですか？」

「えつ？ 誰かいるの？」

「私の、私の声が聞こえるのですね」

「なに!? お、お化け？」

眼下に見える懐かしい木の床。それとあの碁盤。その近くにいた、前髪の色だけが薄い男の子と、かわいらしいお下げの女の子。

『ヒカル!! あかりちゃん!!』

なぜか怯えきっているあかりちゃんの表情に違和感を感じるが、あの2人が目の前に居る。

——ああ、あまねく神よ感謝します。

——私は再び、囲碁を打てる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

あれ？ なんだつけ……。あ、そうだそだ、ヒカルのお祖父ちゃんのお家に行つて、それで古い碁盤に涙のシミがあつて、でもヒカルは血の痕つて……。

「——つ!」

ギューッと締めつけられる痛みを感じて目を覚ました私の視界に、他の何よりもヒカルが暗い表情をしているのが入ってきた。よっぽどなにかあったのか、ゆっくりと頭が

垂れていき、顔に影がかかつてくるのに比例して、腕の力が強くなっているのが、段々とではあるが痛みが増していくことからわかる。

『あかりちゃん!? 急に倒れたから心配したんですよ。ヒカルもずっとあかりちゃんのこと抱きしめて動かないし……』

「あなた、誰?」

首から上を動かして、ヒカルの反対側、右側の方を見ると、よくテレビとかに出て来るお貴族様みたいな服を着ている、真っ白な男の人人が、慌てた様子で私のことを覗き込んでる。心配してくれているのは嬉しいが、先ほどまで影も形もなかつた人の登場と、好きなヒカルが自分を抱きしめていることに、開いた口が塞がらない。

ボソリと呟いた私の声を聞いたからか、私が起きたことに気が付いたヒカルが顔を上げ、心配そうな声で、「大丈夫か?」と尋ねてきたので、とりあえず一回頷くと、明るく気遣つたのか、どこかに悲しそうな感情を押し込めて、とつてつけたような薄っぺらな笑顔で取り繕つているようにしか見えない。けど、それよりも気になる。

「ねえ、ひ、ヒカル?」

「どうしたあかり。気持ちが悪いのか? それとも、吐きそうか?」

「あ、いやそうじやなくて……。そこの白い人つて、誰か分かる?」

「は? 白い人なんてどこにもいないだろ。そこの白い布が人に見えただけだろ?」

寝惚けてるな。なんて愉快そうに笑うヒカルに、頬を膨らませながら、彼の反対側に指を指して、黒いキレイな長髪の背の高い男がいると説明しても、ヒカルは蔵の中をキヨロキヨロと見るだけ。

『ヒカルは、私のことが見えてないのですね』

そんなヒカルのことを見て悲しそうな顔をする男。その顔が、ついさっきのヒカルの笑顔と重なつて見えたことに、私は驚いてしまつた。

「まあ、その白い人がどうこうとかは分かんねえけどさ、今がどうなつてるかはわかるか？」

「え？　あ、うん。とりあえず、ヒカルが実は囲碁の勉強をしていて、それで、ヒカルのお祖父ちゃんの家の蔵に良い碁盤があつたと思うから、それを貰おうつて思つたら、ちゃんと碁盤があつた」

「そうそう。それであつてる。じゃあそこからは？」

「大丈夫。ヒカルには血のシミが見えてたけど私には見えなくて、変わり？　に、私には濡れた跡が見えてたんだよね？」

「正解。その通り。そしたら急にあかりが倒れたつて訳。理解できた？」

理解したという意思表示のために、うん。と一回頷くと、ヒカルは私の身体に回して

いた腕を解き、私に立つよう促した。おいしょつ。という声と共に立ち上がった彼は更に身体を伸ばすと、空気が悪いと言つて蔵から出ようと足を動かし始めた。

「ほら、また倒れたら困るからな。手え貸せよ。ゆっくり降りろ」

普段なら、私の事なんて全く気にせず先々行くヒカルが、私に手を差し伸べたことが恥ずかしくなり、顔が赤くなる中、その手を取つて階段を降り外へと出て行く。

“いつもと違う”

そんな彼にドキドキすると同時に、モヤモヤと少し不安な感情が生まれていた。

## 第四局

『あかりちゃん！ あかりちゃん！』

縁側に座つてちまちまとオレンジジュースを飲む最中、退屈そうに足をぶらぶらと揺らしながら、さらに気怠げに蔵の方向を見つめるヒカルとは違ひ、私は頭を抱えたくなつていた。

『返事して下さいよ！ 見えてますよね？』

もうなに？ と、ストローを口から外して尋ねたくなる衝動を必死に抑え、声を出してしまえば、なにもないのでしやべり出す変な子と思われないように、チラチラと視界に移る白い人のことを無視していた。

『あ、そういうばヒカルは、声を出さずに話しかけてくれてましたね……。あれ、どうやつていたのでしょうか。とりあえず、心の中で私に話しかける事を試して貰いましょう』

なぜか手を合わせて嬉々としている人に、恐る恐る心の中で、『もしもし』と言葉を繰り返す。

『あ、ちゃんと聞こえましたよ。あかりちゃんは上手ですね。ヒカルなんて、最初は無意

識のうちに声に出してしまつていて、周りの人には不思議がられていたのに『

やんちや盛りの大型犬のようにはしゃいでいたと思つたら、今度はすぐに悲しそうな顔をする。

『あ、あの……。あなたは誰なんですか？』

先程から私のことやヒカルのことを知つてゐるよう話してゐる彼にそう聞くと、思いがけない一言が返ってきた。

——幽霊です。と。

幽霊やおばけの類いが恐くて大嫌いな私は、思わず青ざめ、取り憑かれてしまう。呪われてしまふ。なんてことを考えてしまう。

『ふふふ。別に私は、あかりちゃんの体を乗つ取つたりだとか、呪いを掛けて殺そ.udだとか、微塵も思つていません。考えていません。ただ一つ、私の願いを叶えて下さるのであれば、私は他に何も望みませんよ』

『お願い？』

『はい。願い事です。この世にいる強き者。その者たちと互いを高め合い、神の一手をこの手にすることです』

『あなたも、囲碁？』

あなたも？ と言う口調に疑問を感じたのか、男が私に、それはどういうことか尋ね

てきたので、今の状況をそつくりそのまま伝える。すると今度は、とても嬉しそうに『良かった良かった』とはしゃいでいる。

『じゃああなたは、なんでそんな願いを持つてるの？　それに、なんで私達知ってるの？』

『そうですね。話が長くなりますが、主なところを教えなければいけませんね』

『そう言うやいなや、幽霊は一度立ち上がると服を正し、とても真剣な眼をして正座する。』

『私の名前は藤原佐為。ふじわらのさい』

今よりおおよそ一千年前の平安の頃に、帝がする碁の指南役をしておりました。ですが、帝への指南役は私とまた一人菅原すがわらのあきだた顕忠と腕合わせをすることになり、虚偽暴策に煽られ反則と貶され、失意にまま自殺をしました

『それって、嘘うそを言われたって事？』

『はい。簡単に言うと、他人のお金を自分の物であると主張し、何かしらの物品を購入した。と言ったところでしょう』

『それって、完全に泥棒どろぼうじやあ……』

『はい。盗人と変わりません。その無念のまま、気がつけば、江戸時代。あかりちゃんのようく明るい、幼名を虎次郎という少年に取り憑き、また、囮碁の道に入らせていました。』

ですが彼は、流行病で若いながら息を引き取りました』

そうなんだ。思つていた以上に暗い話。悲しい話。でも、

『じゃあヒカルは？ ヒカルと私は何で？』

『そこが不思議なところです。私はかつて、今日のように碁盤から呼ばれ、再び人に取り憑きました。その相手がヒカルです。小学校6年の冬から中学三年生になつた春先まで。だいたい2年と少し。共にいて、共に碁を打つてきました。あの5月5日まで』

『じやあ佐為は、5月5日になると消えるの？』

『それはわかりませんが、5月5日の日に消えた後、気が付けばまた今日、今度は、ヒカルと仲の良かつたあかりちゃんに取り憑いたと言ふことです』

『じゃあ、過去の人だけど未来を知つてる？ 変な話だね』

ふむふむ。と、分かりやすい言葉なので、すぐに理解した私は、ふと一つのことが気になつた。

『ヒカルは、佐為のことを覚えているのかな』

『いえ、わかりません。ですが、藏から出たときの話している具合から、おそらく私のことは覚えていないでしよう』

こればかりは神の悪戯。仕方が無い物。そう呟く顔はやはり悲しそう。

『そう言えば、碁盤に血のシミ？ 痕？ が見えるつて』

『ん？ 吐血痕。でしたら、江戸時代を共にした、虎次郎の吐血痕。それが見えたと言う

ことは、もしかしたら、私の代わりに虎次郎が取り憑いているかも知れませんね。

まあ、気にすることではありません。居たとしても、今の私には見えていませんし。  
とにかく、私はあかりちゃんを呪い殺すつもりは無い。

「のーふろふれむ  
です」

カタコトに近い言い方をした佐為が面白くて、私はとても良い笑顔をした。

【あの対応で良かつたのか?  
う?】  
ヒカルとやら。あなたには佐為との関わりがあるのだろう

（ああ、お前の想像通り俺と佐為には、一言では言い切れない関わりがある。それは確か  
だけどここにいる佐為が、俺の知つていて、俺に碁を教えてくれた佐為かどうかは分か  
らないだろう？）

時間が巻き戻っている。そう考へることにした俺は、考えた。今までの繋がりは、本因坊になつたときに持つていた交友関係、人との繋がりは0。無になつてゐるはず。と。

【そう言うものなのか？】  
【そんなに軽いのか？】

(軽いとか重いとかじやなくて、深いんだよ。2年ちょっとしか一緒にいなかつたけど) 細かな歯車は、一度歪みを生みだすと次々に崩壊していく。それをピッタリと噛み合

わせ修理するのに確実であり最も速いのは、その歯車たちを一度、完全解体して点検すること。そしてそれのために多くの道具が必要になる。あいにく、今の俺にはそんな道具なんて一つも無い。

自分の隣に座り、じーちゃんが出してくれたオレンジジュースをちびちびと飲むあかりは、先程から一人で百面相のモノマネでもしているのか、青ざめたり落ち着いた普通の表情や笑顔になつていて。特に辛そうな顔はしていないから、自分の時のように嘔吐することはなさそうだ。

（よし。あかりも落ちついたみたいだし、パパッと目的をおわらせようつと）

【目的、ですか？　それは一体】

（俺のじーちゃんは囲碁してんだよ。それで、アマだと……えつと、素人の中だと、そこに強いから、そのじーちゃんに勝つて、囲碁をするための、碁盤と碁笥と碁石を買って貰うんだよ）

【なるほどお】

よし、この世界だと初めての対局になる。あの時は、佐為が示した置く場所が分からなくて、じーちゃんをがつかりさせたけど、今回は俺が、俺の碁を打つ。

それに、と横を見れば、いつもあいつがいた場所に違う人ではあるが、俺が憧れ続けた男がいる。

そう思うと、自然とギュッと拳を握り締めていた。

## 第五局

「あかり、ジュースは飲みきつたか？」

「うん。ありがとうヒカル、心配してくれて」

蔵の中で急に倒れたら誰だつて心配すると思うが、それには答えるべきだと素つ気ないものの返答はした。別に普通のことをしただけだし、実際の所ただ抱きしめていただけだ。

「そうだじーちゃん。あかりがここに来てる事つて、母さんとかあかりの家に伝えてる？」

「問題ないぞ。そう言うと思って、ヒカルたちが蔵に入つてゐ間に電話しておいたぞ」  
ただ、何も言わずにあかりまで連れてきた事に関してはかなり怒つっていたようで、しつかり言うようじーちゃんは母に言われていた見たい。

「ところで、ヒカルはなんで蔵なんぞに？　たいして良い物でもないだろうに」

「まあ、それはそうちだつたんだけどさあ……。けどいつか。どうせいつかバレるし、それに、母さんに口利いて貰わないといけないし」「ん？　どういうことだ？」

「いや、単純なことでは、実は父さんと母さんに隠れて囲碁の勉強をしてたんだよ。ただ、一人するのにも飽きてきたから、じーちゃんと対局しようかなあ？」

なんてもつともらしい嘘をつけるようになつたのか。どれもこれもマスコミの所為。すぐに顔に出るタイプの俺が……と心の中で、自虐的に笑っていると、自分の部屋から持つてきたのか、彼が普段使っている物であろう碁盤と碁笥と碁石のセットを持つてきた。妙に顔がにやついているのは気のせいだろう。

「けどお前、前に誘つたときはつまらなさそうにして結局は一度もしてなかつたじやないか」

「あの時は確かに興味なんかこれっぽっちも湧かなかつたけど、たまたま棋譜？ だけ、本因坊秀策のやつを見てさ」

あかりには分からぬだろうが、今この場にいる——目には映らないものの——碁打ちには分かるキーワードを爆弾的に投げ入れる。

「なんて言うんだつけ、『耳赤の一手』だつけ、あれ見て、何が凄いかは分からなかつたけど、コレをやりたいって思つてさ。あんまりと言うより、一度も対局したことがないんだよ。秀策の棋譜とか調べるだけ調べて頭の中で考えることしか出来ないけど」

『一局打とう』と誘われる。孫と囲碁が出来る。しかも、初対局の相手になれる事が嬉しい

いのか、先程から破顔寸前の表情をしてしまつてゐる。

「よしよし、わしとやろうか」

「うん。そのつもりだつたんだ」

【ずいぶん、お祖父様を唆すのですね。もう、あなたのやりたい放題じやあありませんか

?】

(なんだよ人聞きの悪い言い方して。別に何か貢がせるわけじやないだろ? まあ、碁盤とか買つて貰うけど、それは囲碁続けるために必要なんだからノーカン。別に悪いことじやない)

それに、何か目的を達成するには、時に嘘が必要になる。決して長くはないがなんだかんだで20年弱は生きていたし、本因坊戦以外にも、タイトル戦に出たことはあつた。これぐらいのことはしないと何も出来ない。

「じーちゃん。俺出来れば囲碁続けたいからさあ……」

「囲碁のセットが欲しいんじやろ?」

そう言うことだと肯定さえすれば、対局が始まること。条件はじーちゃんに勝つこと。それさえクリアすればどうにかなる。考慮時間は無制限。先手はヒカルが持ち、置き石はなし。とにかく最後まで諦めないこと。そうじーちゃんがルールを説明し、まあ、遊びだから気楽にな。なんて言つてゐるが、飽き性の自分が本当に続けられるのか試す気な

のだろう。

(虎次郎はどれぐらい打てるの?)

【そうですね。それほど強くはありませんよ? 佐為の代打をして、佐為の碁を見ていただけなので】

ですが、と一言付け加えると、

——誰よりも美しく力強い碁を見続けていた自信がありますが。

俺にとつては何よりも羨ましい言葉を臆することなく、躊躇わざはつきりと口にする。今現在、本因坊秀策が打ったと言われている碁は全て、佐為が打っている。その全てを代打していた虎次郎がとても弱いわけでは無いだろう。

(虎次郎。今から見せるのは、虎次郎から見て未来の囲碁だ。そして、この時代でも。俺が佐為から学び、一人で考えて、好敵手(ライバル)と競い合つて、過去と今と未来を繋げた囲碁だ)  
〔はい。楽しみに見ておきます〕

おそらく虎次郎は、ヒカルにとつて自分がどう思われているのか理解したのだろう。くわしくは語られていないが、『佐為から学んだ』ということから、自分は佐為の弟子だと言う認識がある。かつては横にいなかつた兄弟子がいると思つているのだろう。

〔いやはや、子どもは可愛らしく面白い。ならば見せて下さい。あなたにとつて唯一の兄弟子である私に、ヒカルの碁を〕

「よろしく」

「よろしくお願ひします」

前のように指の爪はすり減つていない。ツルツルとした、佐為の長髪のようになきれいな黒の石を落とさないよう、真ん中で見守るあかりと同じように注意して見る。

拙い手ではあるものの、俺はいつも通り右上スミ小目に打ち込み、それを虎次郎はただただ静かに眺めていた。



キレイな物は、花だつたり景色だつたり。私が思うにその多くは色とりどりの鮮やかな物だと思う。

お花畠なんて特にそう。色んな色を付けたたくさんのお花が辺り一面を。だなんて想像するだけでキレイだなーって思えるから。

けど、白と黒の二色でもキレイと思える物が目の前に広がっていた。

木の盤のある二つの色が、黒と白の石たちがまるで踊っているかのように見えたから。

《すごくキレイだね。踊つてゐみたい》

『そ、そうです。綺麗な碁です』

《碁？　碁つてこんなにキレイなの！？》

自分のことを『佐為』って言つた白い男の人が、ヒカルとヒカルのおじいちゃんが挟んだ碁盤を見てキレイだと言つた。私が知つてゐるものは、おんなんじ色を伸ばして、五つつなげるゲーム。

勇ましく陣地を奪い合い、自陣を広げて勝ちを手にする。それが囲碁であり、向かい合うヒカルとお祖父さんは戦い合つていた。善手が見つからない祖父平八に対し、大きくはないが度々ポ力を繰り返すヒカル。

『ヒカルは私のことを覚えていない。見えていない。なのにこれは……』

『この囲碁がどうかしたの？ 佐為』

『え、ええ。打ち筋が私のそれと似通つてゐるのです』

『え？ 何で？』

『それは分かりません』

佐為の目から見て、盤上の囲碁は素晴らしい物と言つても過言では無い。記憶の中にある平八の棋力はそれほど高くないのに。

その彼をヒカルはバレないように上手く紛らわしながら指導碁を打つてゐる。その証拠に、先程から3手連続で、ヒカルは考えなければ形勢が危ない手を平八に課しているのが、見る人が見ればしつかりと理解できる。そして、陣地を取り過ぎないように失着をする。そんな打ち方。

『おそらくヒカルは勝つつもり』

『え？ 勝てるの？ ヒカルのおじいちゃん、さつき色々な大会で勝ってるって言つてたのに！？』

パチッパチッと石が碁盤に置かれていく中段々とヒカルのおじいちゃんの表情が陥しくなつていくのが分かる。

多分、ヒカルが想像以上に強かつたんだと思う。

「ヒカル、いつの間に碁なんて覚えた」

「んつと、小四ぐらい？ ジーちゃんがやつてるの見て、何が面白いのかなあ。なんて思つてやり始めたら面白くて。俺、強いでしょ」

「なーにを言つとる。ワシが最初にちよろーっと油断してたからこうなつとるんじや」

最初から本気で打つておけばおまえなんてちよちよいのちよいじや。なんて負け惜しみを、頭をポリポリ搔きながら言う平八は、それでも嬉しそうにしている。

『佐為？ うずうずしてる。囲碁したいの？』

『え？ いや……』

『だつて、佐為は碁打ちなんですよ？』

『それはそう。なのですが、今は……止めておきます。打ちたいには打ちたいのですが、今はその時じやない。そのような気がするので』

心中であかりと佐為がそんな話をする中、ヒカルと平八は終局し、地の整理をしている。

「ひーふーみーよーいつむーつと、ワシが2目足りんかつたな」

「ははは。よし、勝ったから、約束通り囲碁のセットを買ってくれよ？ そんな桂の足付きとかじやなくて良いから、ずっと使い続けられるやつ」

「分かった分かったあ」

へそくりへそくり。と、まるで呪文のようにぶつくさ咳きながら消えていったのを気にせず、ヒカルはパタンと倒れる。理由はもちろん、自分の後にいた虎次郎に話しかけるため。

(どうだった？ 僕の碁は)

【はい。とても面白い碁でした。彼はそれほど上手な方ではありませんよね？】

(まあ、佐為とか、俺とか、御城碁で対局してきた人に比べればそりやじーちゃんは弱いよ)

【そんな彼を、上手にキレイな碁へと導いていましたから、あなたの実力は相当なものでしよう】

前までは存在しなかつた兄弟子の言葉に少しばかり喜びの色を隠せずにやついてしまうが気にしない。寝転んだまま両腕を頭の下で組み漆喰の天井を眺める。

((このあと、どうしよう))

一抹の不安を胸に握り締めながら。

## 第六局

((さて、どうしたものか……))

風呂上り。帰宅と同時に始まつた、母親である美津子のグチグチとした説教から逃げるために、食卓に並んでいた夕食を一気に搔つ込み食事を済ませ、更に説教が続きそうだったので風呂に逃げたのだが、頭に浮かぶことは囲碁のことばかり。

中学校の卒業間近にしていたような、将来のことを考えよう！　的な感覚で、頭の中に浮かんでいる幾つかの案を書きまとめていく。

まず、将来に関して。それはプロの棋士になること。どんなことがあつても、俺に出来るのは碁を打つことだけ。だから将来の職——実際はもう少しだが——は決まつている。

(問題はそこに至るまでなんだよなあ)

【棋士になるために閑門が？】

(声に出てた？　虎次郎)

ええ。バツチリと。とそう言う虎次郎に、俺は今の時代の『プロ棋士』というものを教えるため、簡単な図にまとめる。

(今の時代、棋士っていうのは職業になつてて、対局料つて形で給金が支払われるんだ。だから、職に就くための試験がある)

【なるほどなるほど】

(江戸時代の棋士の形は知らないけど、今はそんなんだから、院生つていう学校みたいな所があつて。そこからプロ認定試験を受けるか、そこに所属していない外部からの受験をするかの方法しかないんだ)

ただ、俺の実力は軽く見積もつて七大タイトルのリーグ戦に出場できるレベル。佐為や塔矢名人を95から100の間だとすると、大体85から90の間と言つたところ。

(院生になるか。それともならないか。どの棋士を師事していることにするか)

【ヒカルほどの実力があるのならば、院生に通わずともプロになれるのでは? わざわざ遠回りをしなくとも、良い気がするのですが……】

(そりなんだよなあ。ただ、院生じやないと手にできないものも……)

紙に書いていくのは院生になつたときのメリットとデメリット。メリットはもちろん、——自分と年齢は一緒だが——若い子供たちの囮碁に触れることが出来る。それに、仲の良かつた和谷や伊角。他にも奈瀬や越智やフクたちに会える。若獅子戦でも、院生として下克上プレイで楽しめるが、そもそも、そんなに目立ちたいか? と聞かれるとそれは正しくない。

(塔矢が名人位にしか興味がなかつたみたいに、俺も本因坊にしか興味ないからなあ)

【それは?】

(そりやもちろん、俺に囲碁を教えたのが本因坊秀策をしていた佐為だし、兄弟子も、その佐為の碁を代打していた虎次郎だぜ? 藤原佐為門下からすれば当然だろ)

【ふふふ。面白いですねえ。佐為だけでなく、私のことも気にしていただなんて】  
まあ、虎次郎に持つてるのは、碁打ちとしての尊敬というより、死ぬ間際まで佐為の碁を見ていたという一点の羨望。そんなこと絶対に言わないが。

(ただし、デメリットとしては、同年代の子供たち相手が多くなるから、他の大人たちと打つ機会がなくなつていく。控え目に言つてもレベル差があるのに、その中で打たないとダメ。それに、もしかしたら俺が院生になることで腐つて止める人がでてくるかも知れない)

【なら、その師事する相手に打つて貰えば良いのでは? あなたのような人が師事するのです。かなり素晴らしい人なのでしよう?】

そう言われて思い浮かべる人は二人。一人は、今現在神の一手に最も近い男。現名人であり、国内三冠棋士である塔矢行洋名人。

そしてもう一人は、進藤ヒカルが初めて手にしたタイトルである本因坊の座に長年にわたつて座り続けてきた怪物。というか妖怪ジジイこと、桑原仁本因坊。

厳格な性格でどんなときでも未来の日本囲碁界のことを考えていた前者と、おちやらけた性格で、どんなときでも若い世代にイタズラすることしか考えていなかつた後者。（真面目にするなら塔矢名人の方だけど、正直なところ塔矢がやる、進藤！　つていう攻撃がしんどいんだよなあ）

【塔矢？　その人は一体……】

（俺のライバル的な存在。今日本で一番強いプロ棋士の息子で、俺が初めて戦つたとき、実際は佐為の指導碁だつたんだけど、そこから追いかけられまくつたんだよ……つて、碁会所！　それに、子供の囲碁大会!!）

勢い良く立ち上がりがつたせいでガタンと椅子を倒してしまつたが気にしない。

（虎次郎は佐為のこと見えてたんだよな？　佐為の奴、あかりに取り憑いてるんだよな？）

【一応、僕の眼からはそういう風に見えますが……】

なら佐為は囲碁を打ちたがるはず。俺の時ほどではないかも知れないが、あいつは生糸の碁打ちだから。だから、碁会所にも、大会にも顔を出す。

（あいつは、あかりは優しいから、佐為のしたいようにさせるはず。だから、俺は佐為の代打をしていた進藤ヒカルじやなくて、本当の意味で真っ白な進藤ヒカルとして、あかりの打つ佐為の碁と戦う）

「ヒカル？　何時まで起きてるの。早く寝なさい」  
 「はい」

先程の騒音を気にしてかやつてきた母に対してもう一度相槌を打つと、電気を消してベッドに潜り込む。今はまだ12月。春は遠い。

(今日考へるのはここまで、虎次郎お休み)

【ええ。お休みなさい、ヒカル】

進藤家の子供部屋、その灯りは、今日も静かに消えた。

◆◆◆◆◆◆◆◆

『ねえ佐為？』

『どうかしましたかあかりちゃん。話ながら歩くのも良いと思いますけど、ちゃんと前を気にしないと転んでしまいますよ?』

『ふふふ。ヒカルも佐為も優しいね、ありがとう』

左隣にいるヒカルではなく、右側にいる背の高い佐為にニコッと可愛らしい笑顔を見せたあかりは、お願ひして良い？と佐為に向けてそう話を切り出した。

『私が囲碁をの勉強をしたい。って言つたら、佐為は囲碁を教えてくれる？』

『え？ 囲碁ですか？』

『そう。この前、ヒカルがヒカルのお祖父ちゃんと戦つてたのを見て、私もあんな綺麗な

模様を作つてみたいつて思つたの》

『別にそれは良いのですが、私は幽霊ですよ？ いつまでもあかりちゃんの側に居るとは限りませんし、消える可能性もありますよ？』

それでも良い！ と両拳をぎゅっと握るあかりに、交換条件として一つ、佐為はヒカルに相談をすること。そう伝えた。何で？ と首をかしげる彼女に、

『ヒカルは、私の目から見ても素晴らしい棋力。囲碁の力を身に付けています。なので、ヒカルならこの時代の囲碁界のことを詳しく知つていると思いますよ？』

「そつか！」

「ん？ 何に気付いたんだ？ あかり」

《あ、声に出しちやつた……》

『やつてしましましたね。あかりちゃん』

クスクスと上品に手を口許に当てて笑う佐為にあかりは怒りながらも、ヒカルに尋ねてみる。佐為に言つた言葉を少し変えて、

「私が囲碁をの勉強をしたい。って言つたら、ヒカルは囲碁を教えてくれる？」

と。

「マジで？ あかりも囲碁始めてくれるの？ なら教えるぜ俺。ビシツときつちり」

「じゃあ、囲碁界のことも教えてくれる？」

「ああ、もちろんって言いたいところだけど、俺も最近始めたばかりだからなあ。囲碁のことは教えてあげられるけど、今がどんな状況かまでは……」

嬉々として話すヒカルにつられてあかりも笑顔になり、佐為を見てみると、佐為も佐為で笑顔になっていた。

「あつ、それならさ良いのがあるぜ？」

「なになに？」

よおしく聞いとけよお？ だなんて格好つけているヒカルの顔を真剣に見ていると、手をあかりの顔の前に突きだして、まずは人差し指をピシッと立てた。

「1つ目！ 囲碁の基本を教えてくれる囲碁教室に行つてみる」

そこなら色んな人がいるし、プロの先生が教えてくれる。

「2つ目！ 碁会所に行つてみる」

プロの人はあんまり居ないけど、大人の人たちが囲碁のことを教えてくれる。

「3つ目！ 子どもの囲碁大会に行つてみる」

同じ小学生の子どもたちが対局しているのを見れる。

「昨日ちよつと調べてみたのはこれぐらい。囲碁界のことは分からぬかもだけさ、ちよつとぐらいは知れるかもよ」

「そうなの？」

「囲碁界のことなら図書館に行つたら雑誌か何かが置いてるかも。パソコンもあるし色々出来るかも……」

そつかあ。ヒカルも色々考えてくれてることに嬉しくなるあかりは、二つ返事で全部行くっ!! と答えてしまう。

「よし。じやあとりあえず、学校が終わつてからだな」

「うん。それじやあ学校が終わつたら作戦会議だね」

前日に引き続き、藤崎あかりはおかしな行動——この日は奇行——が多かつたというが、それは全く以て余談である。

## 第七局

学校が終わるや否や、友達たちのサッカーの誘いを断つて、俺はあかりと共に図書館へと囲碁のことを探べに来ていたのだが、手に取った囲碁雑誌を見て、俺は顔色を変える。

（なんで、塔矢名人よりも桑原のじ一ちゃんの方が有名なんだよ……）

それもコレも、図書館の囲碁雑誌の七割強が、桑原仁本因坊の○○！と言った内容の雑誌だったから。中には、囲碁界最強の男！とまで書かれた物まで。

「へえー。この桑原って言う人が一番凄いんだあ。あ、本因坊って書いててる」

【桑原……本因坊の名は続いているのですね】

（いや、続いてるのは続いているけど、21世本因坊が、『本因坊』っていう囲碁の位を日

本棋院に名跡を譲つて、そこから世襲じやなく選手権制の大会を作りかえたんだよ）

本因坊秀策。佐為に関するタイトルというのもあり、三大タイトルの他二つである名  
人位や棋聖位には興味がなかつたため、俺的には囲碁界最強の棋士を決める戦いだと  
思つていい。

（今は、挑戦者を決める大会に入りやすく、またそこから落ちやすい厄介な形式の大会だ

よ)

現に、北斗杯のあと15歳のころに本因坊リーグに入れるようになつて18になる3年間をかけてやつとタイトルに着いたのだ。

(俺の時は、この桑原つて人が負けて緒方つて言う棋士に移つて、次の年に桑原のじ一ちゃんが意地で取り返して、それを俺が取つた)

【それじやあ、かなり本因坊の名は移るのですね】

(まあ、1年に1回しか戦わないけど、それ以外でも名は賭けずに別の形で対局してゐる人が相手になることが多いしな)

「つて、桑原のじ一ちゃん！ 本因坊と天元と碁聖まで持つてんじやん！」

「しーつ！ ヒカル！ 声大きいよ」

「ごめんごめん」

記事に載つていたプロフィールをちらつとめくると記されていたその保持タイトルに驚きを隠せず、思わず大声を出してしまつた。それもそのはず、桑原も桑原で俺と同じように本因坊のタイトルが一番だつたから。緒方を倒して碁聖の挑戦権は手にしていたが、その時は勝つていなかつた。

「あかり、ちょっとパソコンで調べたいことがあるんだけど良いか？」  
「ん？ 私も見て良い？」

俺は勿論と答えを返すと、そそくさとパソコンがあるコーナーへと向かい、今のタイトル保持者を調べてみる。そこには勿論馴染みの名前があるが、記憶にあるそれとは少しばかり違う。

棋聖 一柳

名人 塔矢行洋

本因坊 桑原仁

王座 座間

天元 桑原仁

碁聖 桑原仁

十段 塔矢行洋

何より違うのは、もう年老いているのに三冠になつてている桑原仁と、それに比例してか、まだ三冠を手にしていない塔矢行洋の2人。

「凄いねヒカル。この桑原つて人凄いおじーちゃんなんだね」

「そうだな。けどこの棋譜……」

〔凄く強い棋譜ですね……〕

(マジかよ。俺の知つてるじーちゃんよりも数段強いぞ。多分、あの五月の佐為と同等レベル。俺じゃあ、五分に持つて行けるか?)

開いた棋譜は、今期の本因坊戦挑戦手合の第五戦。桑原本因坊が塔矢名人に対し防衛を決めた対局の物。どう見ても、年齢による衰えは見えず、また、自分が知つてゐる彼の棋力よりもかなり高いところにその実力があることが伺える。

「キレイだね。この人の囲碁」

「黒と白のどつち？」

「えっと、白の人」

結果は負けてるけど。とシユンと悲しそうな顔してゐるあかりの頭にポンっと手を乗せ、そのまま頭を撫でる。自分が方が身長が低いせいでやりづらいが気にしない。「この2人は、今の囲碁界での一位二位を争う棋士が戦つてるんだぜ？」凄いよなあ

三敗していく後がない塔矢名人は、退路などないと言わんばかりに愚直にただただ真っ直ぐ進むような攻め手を繰り返しており、それに対して桑原のじーちゃんは耐え忍ぶようできつちりと、それでいてハラリと鮮やかに躊躇続けてゐる。そして所々に散りばめられた綿中蔵針の一手たち。

「こつちの黒の方は、なんて言うか……キレイなんだけど楽しい？　おもしろい？　感じ。なんか好きじやないなあ」

「桑原のじーちゃんの囲碁がおもしろい？　ははは。あかりの感覚もおもしろいな（けど、俺の棋風はオールラウンドだけど、どちらかというと先にある程度形を作つて荒

らしまくる実利派。そう言えば、塔矢とやるときはいつも盤全体を使つてた気がする……。となるとあかりは、模様派の感覚かな?」

【どちらにしろ、基礎があればこそそのものですよ】

(分かつてるよ。だからこそ俺がいるし、佐為もあかりの隣に居る)

「あかりは何か調べたいことがあるか? 無いんだつたら、碁会所とか囲碁教室の事調べたいんだけど……」

「あ、ありがとうございます。ごめんね私はばかりばーっと見ちゃつて」

マウスをクリックして一手ずつ見るようにパソコンのモニターを食い入るよう見ていたあかりは、俺の声で我に返ったのか、急いでパソコンの正面を明け渡してくれる。おおかた、佐為が駄々でもこねて棋譜を見ていたのだろう。

「葉瀬、囲碁教室つと……あつたあつた。あ、近所だ」

ネットの検索エンジンにかけて調べてみると、出てきたのは森下九段の門下生である白川道夫というプロ棋士が講師をしている囲碁教室。

「ここは日曜だから俺たちでも行きやすいな」

「そうだね。碁会所も駅から近いところにあるって」

今度の週末を使って行つてみるかと誘つてみると、すぐさま勿論と答えを返してくれる。

「じゃあ、囲碁教室に行く前に、簡単なことを教えていかないとな。この白川先生を驚かせるぐらいにしてやるよ」

「うんっ！ お願

〔（さて、僕もそろそろ動かないと。佐為は僕のこと見えていなさそうだし、確認しないと……）〕

よし、じゃあ帰るか。そう笑顔で手を差し出すと、あかりも笑顔で手を握ってくれた。

（（これまでと違う。これからが違う。あかりには佐為が、俺には虎次郎が））

「まずは碁石に触れて、九路盤で遊ぶところから始めないとな。特訓は明日から、碁盤とかが手元にないからじーちゃん家でやるぞ？」

肯定の意味を持つ領きをくれたあかりの頭をもう一度撫でてやると、ランドセルを背負つて席を立つ。さて、頑張るか！ だなんて声に出してみると、控えめにオオー！ とノリに合わせてくれる。こんな世界もおもしろいだなんて思えない。だつて確かに違うものが確かにある。だけど、

（（悪くない。かな））

図書館の外の空は、少しばかり赤くなっていた。



『さてあかりちゃん。ヒカルはああ言つてましたが、囲碁は簡単に学ぶ事ができます。

何か大きな紙はありますか?』

『画用紙とかいいならあると思うけど……。それで良いの? 佐為』  
ヒカルに家まで送つてもらつた私は、自室に入るや否や佐為にそう言われた。な  
で、学校の図工の時間で使つた画用紙を引っ張り出す。

『そこ)に、縦と横に九本ずつの路と呼ばれる物を書いて欲しいのです。正方形を作つて  
中に七本ずつですね』

三〇センチ物差しを取り出した私は、佐為が空中に書いた書き方を真似て、それと同

じように書くと、佐為が言うには、『九路盤』と呼ばれる碁盤のモデルが出来た。

『次は、両端の線を含めて左から三つ、上から三つなの交差するところに点を』

「一つ二つ三つ、一つ二つ三つと、ここだよね?」

『はい。そのまま、7の3、5の5、3の7、7の7の四つにも点を入れて下さい、数え

方は先程と同じで、左からの後に上からです』

「一つ目、二つ目、三つ四つと』

分かりやすいようにと、縦と横に数字を入れていく。佐為曰く、横には数字、縦には  
漢数字を入れるらしい。そう言えば、図書館で見た棋譜にも似たようなものが書いて  
あつた。

『それでは、ヒカルに教えて貰う前に、私が簡単にお教えしましょう』

碁盤の種類は大体四つ。私が今作つた9×9の九路盤。続いて13×13の十三路盤。そして、15×15の十五路盤。最後に、プロの対局で使われる19×19の十九路盤。ただし、十五路盤は基本的に使わないらしい。

『そして、先程入れた五つの点が星と呼ばれるもので、一つの目印です。ちょうど碁盤の真ん中にある星を天元とも言います』

用具の説明としては、黒と白の碁石。それらを入れる碁笥。今は紙だが碁盤の三つ。そして、基本的なルールとしては、

『覚えることはたつた三つです。その三つが基本になっています』  
「三つ？」

『はい。ですが大前提に、碁石は線が交差しているところ、目に打つこと。例えば星ですね。今は手短にあるものを置きましょう。消しゴムはありますか？』

私は筆箱から消しゴムを取り出すと、佐為に言われたように人差し指を下、中指を上にして消しゴムを指をトングにしたつもりで挟み、天元に置く。

『そして覚えることの一つ目は、絶対に自分と相手で交互に打つことです。コレをしなければ、反則負けとなります』

後の二つは、石の周りを囲まれたら取られる事。そして、自陣の交点の数が多い方が勝ちということ。

「けど、何がどうなつて終わるか分からぬよ」

『囲碁の終わり方、終局には、中押しによる終わり方ともう一つ、お互に打つところが無くなるかの二つあります』

中押しは、劣勢の者が打つ手が無いとして負けを認めること。もう一つは、対局者二人が互いにどこも打つ場所が無いとするもの。

『最初は分かりにくいかもしれませんが、打ち慣れていけばすぐに分かるようになりますよ』

「うん。ヒカルより上手になる!」

藤崎家の子供部屋。その灯りは、普段よりも少しばかり遅くまで着いていたとか。まあそれは余談である。

## 第八局

あかりが囲碁を勉強するようになつてから、ヒカルとあかりは、学校の休み時間などのタイミングで、マグネットの囲碁を使いするようになつた。生憎、あかりは習い事をしているため、平日に時間をとることが出来なかつたというのもある。

「それにもしても、よくこんな短期間で基礎ができるようになつたな」

凄えじやん。とそう素直に言つてくれるヒカルに、私は頬を赤らめていた。

あの日、ヒカルのキレイな囲碁を見てからだいたい2週間。それが私の囲碁歴だ。手作りの画用紙製の九路盤に紙を切つて作つた黒と白の碁石。それで佐為と一緒に毎晩勉強している。

詰め碁や置き碁。初心者の私に合わせて色々なことをあの手この手で教えてくれる。そして、その色々なことが自分の中に吸収できていることを実感できるのが楽しい。だが、気になることがある。

私の実力が少しずつ上がつてくるのを実感すると同時に、そのたびに出てくるのは一つの疑問。佐為は、ヒカルの碁の打ち筋が自分と似通つていると言つていたが、あの日見たヒカルの碁石の模様ほど佐為のそれがキレイだとは思わないこと。つまり、囲碁に触

れば触れるほど、ヒカルの強さが際立つと言うこと。

「この調子なら、別に白川先生つて人の囲碁教室に行かなくても良いかも」

「そうなの？」

少し前にヒカルが教えてくれた三つのことの一つについてそう言つた。

「たぶん俺より上達するのはやいぞ、あかり。これなら、駅前の碁会所に行つてみるか？」

「多分、大人の人ばっかりだと思うけど」

「なら、碁会所でヒカルとデートだね」

そんなんで良いのかよ。と、遊園地やショッピングがメインじゃないただの約束で、今まで見たことが無いくらいにテンションを上げるあかりに、俺は思わずそんなことを呟いた。

「そんなことで良いの」

それでも、ルンルンと音符のマークが付いてそうなくらいに明るい表情のあかりは、簡単な練習としてヒカルが出していく詰め碁を解していく。今は難しくても三手詰めの問題だが。

「じゃあ、囲碁教室に行くのはやめて、碁会所巡りだな。——記憶の中にあるから——知つてる碁会所に行こうか」

「うん！」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

魔が差した。というか、我慢が出来なかつた。というか、早く会いたかつた。というか、ただただ、碁を打ちたかつた。というか。

正直に言つて、今自分がなぜ駅前の、彼の父が経営している碁会所の前にいるのか。自分ですら意味が分かつていなかつた。隣にいる虎次郎も先ほどから俺の顔を見て訝しんでいる。気づいたら、足が向かつていて、足が向かつていたということが本当に起きるとは思つていなかつたのもあるが。

(ここも、なんていうか久しぶりだなあ)

【そうなんですか？　あまりにもすんなりと気ままに進んで行くので、目的のあるものと。というより、あかりちゃんと来なくてよかつたのですか？】

(いやいや、仕方ねえってあれは)

そう。今俺は、一人で駅前の碁会所へと來ていた。それも偏にあかりに、と言うよりも、藤崎家の折り合いがつかなかつたからだ。

もともと今日の日に碁会所へと行く予定を立てていたのだが、藤崎家の親戚で集まらないと行けない日と被つていたようで、渋るあかりを説得し一人でやつて來たのだ。なんだかんだ言つて、囲碁のことしか頭に無いので、我慢が出来なかつたとも言う。ただ一つ。

(まあ、打たないで良いよな？ 虎次郎)

【ん？ それは一体なぜ】

(なんて言うかな……。壁でいるため。かな)

俺はずつと悩んできた。今の俺はそんじよそこらのプロ棋士にも勝てる実力がある。そのことは傲りでも無くただの事実だ。目隠し碁ではあるが、虎次郎と対局して危なげなく勝てるくらいの実力がある。もし、俺に対抗できるとすれば、

(佐為。塔矢行洋。桑原のじーちゃん)

その三人ぐらいだろう。そこで思ったのは、俺とあかり。そして、塔矢の三人の立ち位置について。知識にあるものとは状況が違う。あかりに佐為が憑いて囲碁をしてい る。

(塔矢の壁こそないけど、今があいつとアレの中みみたいに競い合いたいなんて気持ちは無い)

ガラツと引き戸を開き、ジジイ共しかいない懷かしさに口元を綻ばせる。

「あら、えらく可愛らしいお客様ね。いらっしゃい」

「ははは、いちつ……おねーさん。見学だけしていきたいんだけど、お金つている？」

「うつかり名前を呼び掛けたが、寸前の所でなんとか言葉を留めると、ん？ と首を傾げていたが、打たないのであればお金は取らないとのこと。」

そのご厚意に子供らしく喜んでから乗つて、俺はジジイ共の間を邪魔しないように移動し、お目当ての人の所へと行く。ちょうど、指導をしている見慣れたおかげ頭の男の子の元へ。

塔矢アキラ。現十段と名人の位を持つ囲碁界のトップ棋士の塔矢行洋を父に持ち、幼いころから父から囲碁を手解きを受けていた少年。そして、自分のライバルであつた男。

「ここは、こちらの方へノゾクと模様がハツキリとして動きやすくなりますよ。それに、相手を分断できますから」

「なるほどお。確かに若先生の言うとおりだ」

「すると、ワシの方が打ちづらくなるわけですね」

中が良さそうにガハガハと笑うジジイ共とクスクス笑う少年。手元の盤面は、初心者以上中級者以下のレベルでは難しい盤面。黒と白の碁石が、お互いの領土を求めて戦い合う中盤の模様。若干黒のほうが優勢だろうか。ただ、一目で分かる。少年の言つた手に対抗する策が。そして、対抗策にも対応できる万能性を持つ一手が。

だから、挑発の意味合いも兼ねて、俺は碁盤に石を置いた。

「それもいい手だとは思うけど、ここに打つたあとに大ゲイマを足がかりに攻められる形になるよ。この形はあんまり出ないけど、ノゾクんじやなくて、こっちに飛ぶと両方

に対応できるよ」

気付かなかつた？ 塔矢アキラ君。

俺は、もちろん挑発的な顔と声で。でも、それほど大きな声を出さずにそう呟いた。

「キミは、誰？」

君は誰？ かつて、俺の名前をストーカーのように連呼し、俺の姿を追いかけ、その後、俺が追いかけた存在がそう聞く。

「俺？ 俺は……」

【名乗らないのですか？】

（名乗るのは名乗るけど、なんか素直に言うのはやだ）

【そんな子どもみたいなこと言つて】

やれやれと眉間に手を当ててうなだれている虎次郎を余所に、俺は良いことを思い付いたと、口元を少しだけ歪めると、ゆっくりと口を開く。

「俺はお前のこと知ってるけど、普通は自分から名乗るんじゃ無いの？」

「そもそもうだね」

アキラに囲碁を教わっていた二人の老人が、「なんて無礼な」と、そう騒ぎ立てたのを見聞きして、周りにいた人たちも立ち上がり、こちらの様子を伺っている。だけど、俺とアキラの間にあるのは、凍りついたかのような固まつた空氣。

「僕の名前は塔矢アキラだ。改めて、君は」

「俺の名前は、本因坊光秀。ほんいんぼうこうしゅう 本因坊秀策の流れを繋ぐ、遠い過去と遠い未来をつなげる者つてところだよ。まあ本名は。俺に勝てたら教えてやる」

【僕の名前を使って……】

もういいやと諦めたのか、虎次郎は何も言うまいと口を閉じたのを見て、俺はわざとらしく三日月状に口を歪める。

「恥ずかしながら俺はさ、碁の神様ってやつに愛されてるらしくて、碁盤の中なら、碁の神様の代わりになれるんだよ。九つの星を中心に、対局相手と星を作していく。そして宇宙を創るんだ」

——お前は、俺の前に座れるのか？

仰々しく、また、中二病的な発言のそれは、誰しもが笑うような言葉だったはずだ。ただ、すべての雜音を排するように強い言葉であつた。

「今度、俺の妹弟子がここに来る。塔矢、勝つてみろよ。結果がどうであれ、楽しいと思うぜ？」

正直に言つて、知識の自分よりもかなりの悪者である。まあ、それでもいいかと思つたのは、虎次郎にも秘密にしておく。

## 第九局

それを見る度、いつも疑問を持つていた。

僕の家には、父が子供の頃より前から、誰が打つたのかわからない、2枚の棋譜が残つてている。

1枚は、単純な指導碁。書き込みに今の僕と同じ年齢である、12歳の子供が白番を持つっている。この少年の棋力はすばらしい。だが、指導している黒の者が強すぎる。

少年の意図を読み取り、崩し、際どい状況まで悪化させ、対処の方法を誤らぬよう導くかのよう。父が、門下の者が指導碁を打つときのお手本として、これを見習えというのが、名人と十段の国内二冠棋士の言葉だ。

そしてもうひとつの中盤戦に入つた辺りのところで、黒番の『進』が、『進』が誰のことを表しているのか、どこにいる人で、普段どんなことをしているのかわからぬ。

実力は拮抗しているものの、ちょうど中盤戦に入つた辺りのところで、黒番の『進』が、奇妙な手を打つたところで、終わつてゐる。このあとの展開がとても気になり、昔父にも聞いてみたが、私にもわからないと言わってしまった。

ひとつ言えるのは、この両方の棋譜に出てくる指導碁を打つ黒番と、『進』の打ち筋がかなりに通っているということ。『進』の方が発展していることを考へると、指導碁打ちが、『進』にとつてや師や影響を与えた人物だろう。

到底、同じ人物には思えないという、謎の確信が自分のなかには渦巻いているが。

まあ、何が言いたいかというと、塔矢アキラは、前髪だけ色素の抜けた、童顔の少年。  
本因坊光秀によつて心を搔き乱されていた。そう。その、2枚の棋譜を自分が初めて見たときと同じように。

父からは、心ここにあらずだな。とそう言われ、また、やる気がないならば碁盤の前に座るなどそう言われた。生き死にがかかる勝負の世界で生きているのだ。例え身内の勉強の色合いの濃い対局であれど代わりはない。

頭の中でもちらつくのは、光秀が碁盤においていたあの一手。

見落とすなんていうそんな簡単な問題ではない。その一手が気になつた僕は、家に帰るやすぐに、先ほどの盤面を碁盤に起こしたうえで、囲碁に関する戦略や戦術、対応手を記した書物を引っ張り出して調べた。

「なんなんだ？　この違和感は……」

2枚目の棋譜の謎の一手と、先ほどの一手に、共通点があるよう思える。まあ、行き着いた答えは、驚くような、視界外からの攻撃のようなもの。

「と、あくまでも感じただけだ。そしてこれも」

彼は、一体誰なんだ。浮かぶのはその疑問だけ。違うことを考えようとすればするほど、金髪の前髪がちらつき、苛立ちが生まれる。

「もう寝なきやな」

彼がどんな人物であれ、囲碁打ちである以上またどこかで出会うだろう。そのときに、勝てばいい。何者か知ればいい。僕は無理矢理にそう結論付け、布団の中へと潜り込んだ。

◆◆◆◆◆◆◆◆

家に帰ると同時に、ドサツとベッドに倒れ込む。

頭の中がぐちやぐちやとしていてまとまらない。

自分の立ち位置。状況、環境。その他もろもろ。性格や性質、本質は大きく変わらないだろうが、進藤ヒカルそのものとしても、色々と変わっている部分がある。

（俺は俺だ！ つていうのはあるんだけどなあ）

【それは、先ほどの本因坊光秀というのに関係が？】

（あるある。ガツツリ完璧にな）

顔を掛け布団に埋めていたのもあつて、曇つた声を出していたヒカルは、クルツと体の向きを変え、うつ伏せから仰向けに、天井を仰いだ。

(俺は二度目の人生を過ごしてゐる。ちょうどあの日に佐為と出会つて、囲碁に触れて、今日会つた塔矢と対局して)

院生になつてから和谷、伊角、名瀬、越智、フクと競いあつて。秀英スヨンと戦つて、プロになつて、佐為がいなくなつて、腐つて、囲碁コヨンが辛くなつて、囲碁から離れて、伊角さんに火を付けられて、北斗杯に出てら、高永夏と戦つて、囲碁を打つ意味を知つて。なにより。

(二十歳手前で本因坊をとつた)

佐為と出会つた。きつかけは小さなひとつでも、多くの人と関わつて、色んなものを身に付けた。佐為の打ち方が基本だけど、独特的の打ち回しは、進藤流だなんてブームを呼んだ。

【あなたが何を悩んでいるのかは知りませんし、皆目見当もつきません。ただ、貴方は前に、藤原佐為の門下だと言つてました】

部屋の入り口で佇んでいた虎次郎は、ゆっくりと言葉を口にしながら近づいてくる。  
【ですが、貴方は貴方です。経験した記憶があろうが、知識があろうが、この世界での進藤ヒカルは貴方しかいないのでは?】

——なら、貴方のしたいことをするべきです。

【貴方は何がしたいですか?】

沈黙。何も言葉を発することができなかつた。俺は俺だ。その思いはあれど、知識が邪魔をする。

【貴方が囲碁を打つのは、貴方の意思ですか？ それとも、佐為からの指名ですか？ んのための、碁石を手に取るのですか？】

「そんなの！ そんなの……」

そんなの決まつて。俺は俺だ。俺は俺のために囲碁を打つ。佐為の囲碁を見て貰いたくて、こんなにすげえやつがいたつてことを知つてほしくて。佐為が求めた神の一手がどんなものか知りたい。なまじ、きっかけが佐為である以上そこは離れない。

「俺は前の俺なんか知らない。俺は俺だ。俺ができる囲碁で、一番強い称号を、俺の代名詞にする。佐為なんて知らない。俺はただの」

神の一手を極める者だ。

【なら、それでいいじゃないですか？ 本因坊光秀くん？】

「やめてよ虎次郎。俺は進藤ヒカルだよ」

【なにを今さら、あれだけの人の前で啖呵を切つてるんですから退かないで下さい。なにより、本因坊の名を使つたんですから、彼の前だけでも、本因坊の名に恥じぬ行動をしてもらいます】

あつ、これヤバイ。

【寺子屋——学校——では学ばない、色々なことを教えていきますからね。いいですね?】

何か変なスイッチを入れてしまつた。そう後悔してももう遅い。後悔先に立たず。後の祭りというやつだ。

【先ずは貴方のその汚い字です! 本因坊の名を名乗る以上、その人となりを表す字は綺麗でなくてはなりません!】

そう言われて、思い出すのは広島の因島で見た虎次郎の碁盤と、碁盤の裏に記されたいた虎次郎の綺麗な字。あれこそ達筆というものだと、未だに思う。

【明日から。いいですか? 明日から、貴方の色々な部分を矯正していきますよ】

「へ、へえ~い」  
【返事は一回ですし、そんな気の抜けた適当な声を出さない。それとも、挨拶から勉強したいですか?】

自分は小さな子供ではない。想像しただけで嫌な状態になるのがわかっている以上、すぐさまちやんとした声で返事し、ベッドに潜り込む。

部屋の電気を消すときに見た、虎次郎の悪い顔が怖かつたせいで、なかなか寝付けなかつたが。

## 第十局

ヒカルの観察日記つて言うにはおかしいけど、最近、ヒカルが様変わりしすぎてて変だから、何が変なのかノートにまとめてみた。

学校で気づいたこと。なぜか姿勢が良くなつて、シャキッとしてる。字がきれいになつてきて、読みやすくなつてきてる。声もはつきりしてて聞きやすいし、給食も、いつも以上にきれいに食べてる。

そして何より、あの倉の時から、子供っぽい雰囲気から大人っぽくなつた。けど、大人っぽくなつただけであつて、落ち着いた雰囲気をまとつていた訳じやない。

『なんか、進藤つて最近かっこいいよね』

『分かる。はしゃがなくなつたし、休み時間と授業の差がスゴい』

これがギヤップ!? だなんて周りの女の子がヒソヒソ声で話しているのが聞こえてくると、胸の内がムズムズしてくる。そんな私を見て佐為がニヤニヤしているのもすごくムズムズする。

なんというか、ヒカルが優しくなつたけど、私以外にも優しくしてるのが嫌だなあ……。なんてことを、休み時間に思つてしまふ。ちょうど今も、女の子と話して

る。

『あかりちゃん？ どうかしましたか？』

ずっとヒカルの方を見て。

「ヒヤンツ!!」

急に話しかけてきた佐為に驚いて悲鳴にも似た声を出し、周囲の視線を集め。勢いよく立ち上がつたせいで、座つてた椅子も床に倒れ、強烈な恥ずかしさが込み上げてきた。

『佐為つたら、急に話しかけないでよ。変な声出ちやつたし……』

何事もないように装つて椅子を直し、もう一度座り直すと、大分慣れてきた心の中での会話を始める。まあ、佐為の謝罪から始まるのだが。

『それについても、先日は残念でしたね。折角ヒカルと碁会所に行ける機会が』  
『本当にそうだよ。お父さんとお母さんのバカ。折角のデートだつたのに』

付き合つてはいなもの、二人きりで出かけることは初めてだ。幼馴染みであり、家族同士でのイベント事は度々あつたが、それでもというやつである。その場所が碁会所なのはこの際おいておこう。

『それにしても、あのヒカルの佇まいと言い、文字の形と言い。すぐ既視感にかられますね』

『きしかん?』

『見たことがあるという意味ですよあかりちゃん。ただ、それがいつだつたか、誰だつたかわかりませんが。なんとも釈然としない……』

まあ、幼馴染みである身からすると、違和感しかない態度であるが、恋する乙女でもあるあかりにとつては、プラスの面が強いので、あまりに気にしない。

『今日は塾があるから、ヒカルと碁は打てないしなあ。塾の宿題が終わつたら、もう寝る時間だろうし。一局ぐらいならできるかな?』

『それはもちろん問題ありませんよ? 私はいつでもうえるかむです!』

「あかり?」

「どんつ!」と胸を叩いた佐為のとなりから、見慣れた顔と聞きなれた声の少年が、佐為を邪魔するかのように急に現れる。いつの間に印刷したのか、片手に地図を持つて。「この前、二人で碁会所に行けなかつただろ? だから、場所だけ先に教えとこうと思つて。昼休みに図書室で地図印刷してきた

「あ、ありがとう」

「今度こそちゃんと行こうな!」

純粹な満面の笑みを見たあかり、それだけで嬉しくなり、今度こそはと、家に帰ると同時に、週末の予定を念入りに確認していた。



来る日曜日。ヒカルとあかりは、駅前の碁会所『囲碁サロン』へとやつて来ていた。のだが、二人は、違う意味で緊張した面持ちをしている。

一人は純粋に、大人ばかりがいると聞かされた碁会所に、初めて足を踏み込む高揚感と緊張感。これはもちろん、碁会所デビューを今日果たす、藤崎あかりのことである。

そしてもう一人は、いたずら心に身を任せ、盤上をかき混ぜたような突撃事件をぶちかました、自称本因坊の流れを組む、本因坊光秀こと、進藤ヒカル。

「なああかり？ 実はこの前下調べがてらにここに来てさ、ここで一番強い人に喧嘩売つてきたんだよ。本因坊光秀つて偽名で……」

「えっ？」

『えっ？』

ヒカルにはわからないものの、あかりと佐為は、照らし合わせたかのように驚いた声を口にする。

「何で偽名なんて使ったの？」

『なぜ、ヒカルは本因坊の名を名乗ったのですか？』

質問の内容は同じ。ただ、聞こえない佐為の質問は、あかりのそれよりも深い。なら、『本因坊』という名前の重みを知っているから。

「俺は俺でやりたいことがある。それをするためには、今から会うやつの壁にならないといけないんだけど、本名を教えると、何でかわからぬけどダメな気がした」

【特に言い訳も考えていなかつたんですね】

（うまいこと思い付かなかつたんだよ！）

「とりあえず、そんなわけだからこれから会う人の前では、俺のことを本因坊光秀って読んでくれ」

「ヒカルじやダメ？」

「んじやあ、フルネームを聞かれたら、その名前で。良い？」

「わ、わかつた」

じやあ、入るか。

氣負うこともなく、簡素なドアノブに手をかけると、そのまま中へと入る。鼻を掠める煙草の紫煙と止むことのない、碁石を打つていることで碁盤と碁石が当たる音。暇を持て余した爺たちが話を続ける。

「す、スゴい……」

「怖い？」

「ちよつとだけ、ね」

すぐなれるよとそれだけ言うと、ポケットの財布から千円札を取り出して、そのまま

受け付けにいた市川さんに、二人分でと伝える。

「今日はかわいい女の子をつれてきたのね。光秀くん」

「可愛いでしょ。自慢の彼女です」

突然のことにつぶやきがわからず、ブリキのようにふるふると震えるだけで思考停止をしてしまったあかりを他所に、初回——前回は挑発のみで打つていないうえ——登録の書類を書く。

「あらあら、最近の若い子つたら」

そういうながらも、『本因坊光秀』と『藤崎あかり』の二つの名前が記されているのを確認した市川さんは、

「彼、今日もいるわよ。とだけ教えてくれる。

大人はほんとに勝手だ。当事者——ヒカル——の気も知らないで。

「やつと来たんだね。本因坊光秀」

「お前それ、ストーカーみたいだぞ。大丈夫か？」

店の奥からやつて来た一人の男の子。艶のあるおかっぱ頭の男の子は、柔軟な、優しい雰囲気を残しながらも、自分の知っている厳しさも鋭さもある目付きへと少しだけ変わっていた。

「その子が前に言つていた？」

「そう。俺の妹弟子。藤崎あかり」  
 「あ、えつ？ ふ、藤崎あかり、です」

わたわたと、状況についてこれていなあかりが、なんとか挨拶だけすると、ヒカルはあかりの腕を取り、そのまま奥の方へと進んでいく。もちろん、碁を打つために。

「さて、さつきも言つたけど、あかりは俺の妹弟子だ。俺が師匠から貰つたものを、そのまま教えるからな。んでだ。塔矢アキラ君」

——あかりとの対局で、俺を満足させろよ。

あかりと対面して座ったアキラを、あかりの後ろから見下ろして挑発する。口許が三日月の形になつていることはこの際良い。

優しいあかりのことだ。佐為が、自分以外と打つ初めての状況で、その場所を譲ることは想像し難いことではない。

あのときと同じ碁になるかならないか。今のヒカルにとつて、興味があるのはそこだけだ。

「藤崎さんに勝つたら、僕と一局、打つてくれるかい？」

「勝つたらじやないつて。この前言つたよな？ 俺の前に座つて、俺と一緒に宇宙を創る資格があるかどうかだよ。お前の勝ち負けなんて、俺にはどうでも良い」  
 さあ、早く握れよ。

そんなことを上から目線でいう本因坊光秀こと進藤ヒカルに、虎次郎は、彼——塔矢アキラ——が関わると、性格が変わると、あきれっていた。

A vertical column of ten diamond shapes, alternating between black and white.

藤原佐為は、わりかし記憶力に優れている。暮打ちはそれなりに記憶力が良いので、偏に職業的なものとも言えるかもしれないが。

「(やはり、この字の形は……)」

その、千年前から積み重ねてきた記憶の泉に、波紋が広がる感覺だつた。なぜならそれは、今から約二百年ほど前——といつても、碁盤にいた間の時間感覺はほとんどないので、少し前——に見た、見慣れた字。

彼元来の癖がでているためにわかりづらいが、それでも私には分かる。見慣れた、美しい字が混ざりあつてゐるのを。

『(虎次郎。あなたはここに……)』

姿勢がよくなり、一画一画がはつきりとした字になつたヒカル。学校で見た、字を書く時のピシッとした姿勢は、御城碁に参加するようになつた秀策の姿に似ていて。また、話口調も、今まで通りの口調になるときもあるが、落ち着いたものにもなつていて。そして何より、本因坊光秀という名と、ヒカルとあかりの師が同じであるという言い回し。

『（ヒカルは七割、いや八割ぐらい、私の知っているヒカルではないでしょうか）』

アキラの口調では、本因坊光秀の名で先日ここに訪れ、あかりの存在を、妹弟子として紹介している。子供っぽいヒカルのことだ。どうせそのまま、挑発の一つでもしていただろう。

『ねえ佐為』

『どうかしましたか？』

『今日は、佐為が私以外の人と打つ最初の日だね』

『え？』

自分の思考を遮られて声をかけられ、また、自分には思いもしないことを言われたことに、私は間抜けな声を出していた。

『だつて私はヒカルとだけ打てれば良いもん。ヒカル以外と対局するときは全部、佐為が打つて良いんだよ？』

『でも私は……。いえ、またあとで話します』

何を言おうとしていたのか気になるのか、あかりは私の顔を見て首をかしげている。

そんな彼女の頭を撫でたくとも、幽霊の身では触れることもできない。

私の身は、またもあの日に消えるだろう。その言葉は胸の内に秘め、私は成り行きを

ただ見守ることにした。

# 第十一局

世界が広がっていく。宇宙が広がる。

碁盤に置かれる一手一手が宇宙空間に広がる星達のように瞬き、僕の白石を黒石が飲み込んでゆく。だがそれは、一方的な蹂躪なんかじやない。丁寧に優しく。そんな言葉が似合うような、絶対的強者からの手加減。

始まりは、秀策のコスミから始まつた。打ち筋はしつかりしている。参考にしている打ち筋が古いからか、江戸時代のようなものがちらついていたが。

だが、そんなものも気にならなくなるぐらいに、僕はこの碁にのめり込んでいた。悔しい。たどたどしい手つきで黒石を指の間に挟み、そろおつと碁盤に石を置く女子に手加減をされていることに。そして、自分が本当に戦いたい存在の前に、超えられるのか分からぬほど高い壁が見えるから。

「……い、おま……」

思考がまとまらない僕の頭に、かすかな声が聞こえてきた。

黒番。突きつけられた突然の選択肢。進むか、退くかの二択の中で、動かない頭を必死になつて動かそうとしている中でのそれは、確かに、本因坊光秀の口から聞こえてき

た。

「なんで俺じや無いはもう良い。俺は俺だ。誰がどんな碁を打とうが関係ない。知識はあれど、過去は過去」

小さく、ブツブツと声が聞こえる。対局者の女の子は、その声に聞こえないようだが、光秀は確実に声に出している。

この碁に対して、この盤面に対して。

「え？ あれ？……」

気がついた瞬間の僕の顔は、とても歪んでいたことだろう。理由は一つ。この囲碁を僕は知っていたから。

あの日見た謎の指導碁と、瓜二つだから。

「全く同じ……」

「なにが？」

「いや、こっちの話だ」

自分の声に反応した

今進んでいる盤面を記憶から掘り起こし、次の一手を一度打つてみる。この理不尽な状況から脱するための反抗の一手。すると、あらかじめ予想していたかのように、スルリと知っている手を打ってきた。

(まさか。全く何も知らない人が、他の人に全く同じ碁を打たせるだなんてことは100%無理だと断言しても良い。ただ、僕はこの碁を知っている上に、恐らく彼女も知っている)

なら、精一杯抗おう。

一度目を瞑り、頭の中を空にする。作られた宇宙なんてものは全く必要など無い。今の僕に必要なのは、銀河を作り出すための知識だけ。他は全て切り捨てて、打つ。パチツ。

いま、塔矢アキラの歯車は動き出した。大小様々な歯車とは咬み合っては無い。あくまで動き出しただけ。だが、その小さな一步が、塔矢アキラにとつてはとても大きな意味を持ち始めた。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

ただただ、つまらない盤面が続いていた。

記憶通りの石の動き、盤面の進み方、一つ一つの小さな勝負。  
(面白くないな。つまんない)

【なにがです?】

(分かつちやいたけどさ、まあね。何て言うか、違うんだよな)

【それは? この子供がと言うことですか?】

そう、違うのだ。たしかに、俺の横に座り真剣な表情で碁を打つているのは、俺が初めて気圧された塔矢アキラそのものだ。小学生にふさわしい顔からコロッとした見え、人を射さんとするような眼光になる前の、唯一の顔。

だがやはり、ともに上を目指したからこそ、どうしても自分の知っている塔矢アキラと同じには考えられない。

（たしかに、今の年齢で見てみれば十分に強い。けど足りない）

そんなときだつた。アキラの持つ白石が、光つたように見えたのは。

なんの代わり映えもないただの一手。意味が無いとは言わない。盤面との関係からみれば、佐為の攻撃から耐えしのぐためのもの。だが、

（そう。こうだよアキラは。どんな不条理な状況でも、一矢報いるために頭を捻り、隙あらばその首を取りに来る）

〔ただの耐えるような手に見えますが〕

（いや、あの一手からある程度巻き返すことは出来る。並のプロ棋士であればの話だけど。佐為なら気づくと思うぜ。後々気づいても対処するのに手間を取るほどの実力じゃないはずだし）

数秒間手が止まつたあかりーーをあやつる佐為ーーが、その碁石を無視する形を取る。干渉はしない。ただ、警戒はするような一手を指した。

(（そう言えば昔、佐為は塔矢のことを龍か虎かに化けるつて言つてたよな。露骨すぎるわけじや無いけど、念のために構える。的な感覚かな）)

そんなとき、背筋に悪寒が走る。目元が鋭く眼光が鋭くなつた塔矢を見て。にやりと口元が歪んでいる気がする。思わず、悪い顔をしているだろう。自覺しかない。

(収穫だぜ？ 虎次郎。良い物が見られた)

[ははは、それはよかつた]

(確かにここに居る塔矢アキラは、俺の知つてゐる塔矢アキラじやない。けど、根底は全く同じ。そこに關して言うのであれば俺の知つてゐる塔矢アキラだ)

今のコイツであれば、しゃーなしの一局ぐらいなら、打つても良いかな。だなんてことを思つてしまう。

塔矢が放つた抵抗の一手より前と後とでは、雲泥の差があつた。それは実力ではなく、碁としての、対局としての学ぶことの質とでも言うもの。

恐らく、あの上昇志向の塔矢だ。今頃脳内では、湯水の如く湧いてくる一手一手に心を躍らせていることだろう。目線は厳しいままだが。

(取りあえず佐為がいるのは確定。この碁の入り方があの時と同じだから、俺のことを知つてゐる佐為かはわからないけど。まあ、そこは関係ないな)

【そうですね。代打であろうと、対局しているのはあかりさんですしね】

(それと……)

【ヒカルから見て、塔矢アキラは対局する価値がある。ですか?】

(さすが兄弟子。そのとおりだよ。今の塔矢なら……)

「ぶちのめしてもいいかな」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「塔矢。この一手はなんだ?」

対局は、僕が負けた。

遙かな高みから、するすると通り抜ける川の水を掴もうと必死になつて打ち続けた。けど、溺れる人がどれだけもがいても一人で助からないのと同じで、僕は、その水を捕まえることができなかつた。

大敗だ。抵抗からの反逆。あの一手から始めた僕の碁は、全く通用しなかつた。

「これは……」

盤面をまとめるような綺麗な一手なんかじやない。どちらかというと、無理矢理打つた、やけくその一手だ。でも、悪い手なんかじや無かつたと思う。

「この一手の先に、お前が見たのはなんだ?」

静かに。あくまでも静かに光秀は僕に尋ねてくる。

対局が終わってから10分弱。未だに、僕が同い年の女の子に負けたことに対する喧騒が続いているが、その音の中を搔い潜るように、それほど大きくも無い音量で聞かれた。

だから僕があの一手を打ったときのことを伝える。

「僕は、本因坊光秀、君と打ちたいんだ。だけどその前に、僕の前に壁があることを知つた。溺れた川で、必死になつて水を掴もうとしている感覚だつたよ」

「それで？」

「だから、川の流れに身を任せて、岩にぶつからない一手を打つたつもりだつたんだ」  
そう。あくまでも、流れはそのまま。碁としての流れをそのままに、抵抗の意志を持つて、大きな壁に立ち向かつたのだ。  
ヒカルは、今だからわかることだが、あの日の碁と見比べて、断然に良い碁を打つた塔矢に内心で拍手を送るぐらいに。

「よいしょっと」

僕の言葉を聞いた光秀は、何を思ったのか隣の席二つ分の碁盤と碁笥を運んでくると、先ほどまで僕と藤崎さんが対局していた碁盤の石を取り除いていった。

あの一手の所まで。

「俺が今までで一番悔しいと思った碁と、一番楽しかった碁。見せてやるよ」

そう言つて光秀は、僕のあの白石を。しつかりとその手に納め。別の所へときつちり、パチツといい音を立てて置いたのだ。

## 第十一局

俺がタイトルを取る直前くらいに、桑原のじーちゃんが最高齢本因坊としてのインタビューで言つてくれた。

「進藤ヒカルの碁といふものは、まるで五行を表しているかのようだ」

五行というのが、中国から伝わる五行思想というのだと知つたのは、タイトル戦の二戦目。件の桑原のじーちゃんから意味を教えてくれた。

曰く、坊主の碁は、決してまつすぐなわけじや無い。複雑に曲がり絡み合う木のように、曲直としている。

曰く、坊主の碁は、どんな局面に会おうとも退かずに進む。天高く上り続ける炎のように、炎上している。

曰く、坊主の碁は、数多くの戦術を理解し、作物に恵みを与える土のように、稼穡かじょくとなつてている。

曰く、坊主の碁は、実際に必要な物以外の多くを切り捨てる。加工され姿をかえる金のよう<sup>じゅうかく</sup>に、従革じゅうかくを行うと。

曰く、坊主の碁は、決して淀みなく盤上を作り上げ、静かにゆつくりと全体を潤わす

水のように、潤下じゅんげが起きていると。

俺や塔矢。伊角さんや和谷たちのおかげで盛り上がっていた囲碁界で、一番多くの碁を知る棋士からの言葉は、世間一般を巻き込み、一時期「五行」と言う言葉がトレンドになってしまっていたらしい。

まあ何が言いたいのかというと、俺は今、二つの碁をあかりと塔矢に見せるために石を並べていた。今並べているのは、先ほどまでの指導碁からの続き。塔矢が打ち替える前の棋譜。

「やつぱり、全く同じだ」

「どうしたの？ 塔矢くん」

「どうしたもこうしたも無い。藤崎さんとさつき打った碁も、この碁なんてまさにそうだ。君たちは、なんで僕の家にある棋譜と同じように打てるんだ」

棋譜？ あの時の棋譜？ それこそ、なんで塔矢の家にあるんだよ。と言うのがヒカルの心情なのだが、もちろん口にしていない。

「目の前のこと集中しそぎて盤面が見えていなかつた。だが、この碁が僕の知つている碁だと気づいたから、あの手が出たんだ。それを本因坊光秀！ 君はいたつて普通に見せつけた」

なぜだ。そう言つて、塔矢は俺の目を見つめてくる。の人変わらない鋭い目つき

で。

「んなもん知らねえよ。俺は、この碁が一番悔しかつたから並べただけだ」

この碁が悔しい。そう思つたのは単純なことだつた。何時でも頭によぎるから。何度も何度も。理由もなく指示された場所に、碁石を置いていくだけ。そこには、進藤ヒカルにとつて何も生産性のないもの。

「今なら、どんな一手でも意味が分かる。だから、塔矢の打つたここの一手がとても俺を楽しませてくれた。今度は、俺が、俺の手で、続ければいい。そしてもう一つが……」

そう言つて、もう一つの碁盤にも、黒石と白石を交互に並べていく。

「塔矢。さつきの棋譜が家にあつたのなら、もしかしたら、この譜もあるんじやないのか？」

「それは一体……まさか」

「これは俺が、今までで一番楽しかつた、自分が理想とする碁に近づけた時のだよ」

江戸時代を象徴する秀策のコスミ。それは、初手から数えて4回連續で、星を外したコスミを打つ戦法。先番の時、しつかりと勝ちに行くときには使われていて、江戸時代の戦法であつても、アレンジを加え今でも残る戦い方。

「俺の基本戦術は秀策のコスミ。そして、得意なのは宇宙流。つまりは三連星だが、その中でも、牛角の形から真ん中を荒らすのが得意だ。だからその二つを合わせた、本来の

位置よりも上と下が「目」とにずれた形の牛角をよく使う」

こんな風にと見せるように、先ずは右上の星の右隣。続いて白が左上の星。黒が右下の星の右隣。白が初手にカカリ、続いて黒が左下。そんな風に、歪な形の牛角が形成されていく。

「ヒカルの打ち方って、めずらしいんだよね？」

「そうだ。だが、白番はやけに落ち着いているな。こんな布石初めて見るのに」

「単純な話。白番と俺は、ほとんど毎日のように打つているだけ」

何度も何度も研究され尽くしている。だが、俺にとつてこの形は、佐為と秀策の江戸時代。そして現在の三連星。その二つを繋ぎ、未来を見せるための布石。

「やっぱり、ヒカルの碁は綺麗だね」

「ありがと」

ドンドンと石を並べ続ける内に、見えてくるのは互いの形。ある程度先に形を作つてから、盤面が混沌に陥るレベルで荒らし始める黒番に対し、白番は、どつしりと、落ち着いて一つ一つ対処している。

（あかりは、何を思つて俺の碁を綺麗だつて、言つてるんだ？）

【そんなこと、僕はあかりさんでは無いので分かりませんが、なんとなく、流動的で素晴らしい打ち筋だと思いますよ？】

(へいへい、そりやどーも)

【返事は一回でよろしいと何度言えば分かるのですか？ ヒカル】

そんな風に、見えないところでの漫才を楽しんではいるが、不意にあかりが口を開いた。

「これ、図書館で見たあの、負けちゃつた方の碁みたい」

「負けた方？」

「今期本因坊戦の第五戦の話。つまり、この白番の内筋が、お前の親父に見えるつて話だよ」

本因坊戦の棋譜上だと、状況も相まって塔矢名人は強く攻勢に出ていた。この盤面だと、ゆっくりと、池に氷が張るようになめらかに碁を開いていく。

イメージ上だと、そんな違いがあるのだが、やはり、親子である以上やはり、棋風が似ているのだろう。

【それにしても、あかりさんは良く気づきましたね】

(ほんとに、前じやヘツポコだったクセに……妙に勘が良いんだよな)

「そして、ここで黒番がーー

「ーーの八」

「やつぱり、この棋譜か……」

パチッと、塔矢が言つた場所に黒石を一つ打つ。

「この一手が分からぬんだ。どこにもかからない。攻めも守りも、何もかも、この石は何も意味を持つていねい」

「何て言うんだつたか？　ハメ手？　だつたか？」

「ハメ手だと？　この碁には、続きをあるのか？　僕の家にある棋譜には、ここまでしか記されていないぞ。どういうことだ」

んなもん知らねえよ。と内心で何度目かの暴言を吐いたとき、周りが喧騒に包まれた。あかりと塔矢が対局していたときの比では無い。

何が起きた。そう思つて視界を上に上げたとき、あの男が、俺のことをじつと見つめていた。

天辺の毛が無い禿頭。カツパのように伸びた白い髪。線のような目に、しわで伸びた口元。そして、強さを感じさせる、堂々たる出で立ち。

「こんなところで進藤五行流の講義か。ほれ、わしも交ぜでくれんかの？　なあ、坊主」「ははは、なんでこんなとこにいんだよ。塔矢名人の城だぞ？　桑原のじーちゃん」

「ほれ、耄碌ジジイの暇つぶしじや。まあ、ホントはお主に会いに来たのもあるがのぉ」相変わらず、食えないカツパだな。

【これが、今の本因坊ですか……】

(そう。現在、国内三冠棋士であり、本因坊の称号を持つ、桑原仁本因坊。その人だ)

「ほお、わしのしつくすせんすがビンビンしとる。  
((このジジイ。ほんと妖怪だな))

気がつけば俺は、口元を歪めていたらしい。

二人、  
じやな  
ー

## 第十三局

妖怪は嫌いだ。大抵の人がそうだろう。幽霊でも、幽霊が怖いだなんて言つてる奴もいるし。まあ、普通はそうなんだと思う。

斯く言う俺も、この妖怪が嫌いだ。桑原仁本因坊。この世界の、日本圍碁界において、最強の妖怪が。

「ふおつふおつふおつ！ それで坊主。何して居つた」

「別に、名人の息子がどれぐらいの強さか、確かめてただけだよ」

「ほお。それでどうじやつた？」

卓上に並べられた二つの碁盤をじっくりと見ていた桑原のじ一ちゃんの質問に、俺は、「全然」と一言だけ言う。ガタツと、塔矢が椅子を倒すような勢いで立つてしまつたから、隣のあかりがびっくりする。

大丈夫か？ と聞かないと後で虎次郎にあとでどやされる気がししたのでケアだけ

はしておく。ウンウンと頷いているから大丈夫だろう。

「まあ、それでも、思つてたよりは良かつたよ。幾分か。のレベルでだけど」

「そうかそうか」

会話が終わつてしまつたことで起きる数秒の沈黙。その中で、再びの幻想が巻き起つて。内容は一つ。本因坊光秀が、平然と日本の囲碁界で最強の存在と話していることに

「ちよつと待つて？ ねえ光秀君。あなたはこの方とお知り合いなの？」

恐らく、ここに居る野次馬達の代表として聞いてくれたであろう市河さんの言葉に、俺は肯定の意味を込めて簡単に「うん」と頷いた。

そもそも、知り合いじやなかつたら話さないとと思うけど。

「光秀？ 坊主の名前はヒカルじや無かつたのか？」

「ああ、それはあだ名なんです。小学校のクラスメイトは、ヒカルって呼んでます」

ナイスアシストあかり！ 持つべきは物わかりの良い幼馴染みだ。

「ふおつふおつ！ まあ名前なんぞどうでも良いわ。それでーー」

「あ、あのっ！」

「ん？ どうかしたのか？ 塔矢の倅」

「あ、あの、桑原本因坊とこの本因坊光秀は師弟関係なのですか？ 凄く、仲の良い感じが気になつて……」

ふむ。と、何かを考えるようにひげを触り始めた桑原は、少しばかり考えるそぶりを見せると、簡単に、光秀にとつて囲碁をするときの保護者のような存在だとそう説明し

た。

最後に、コイツは認めんがの。と笑いながら言っていたが。

「まあ、こやつは強い。儂でもしばしば負かされるような棋力を持つて居るからな。本当に、碁の神様が居るとしたら、そやつに愛されて居る」

「そ、そうですか……」

「光秀。まさにその名の通りの存在じやのぉ」

常に成長し、他とは異なり優れ飛び出る。囲碁界の玉であり、誰よりも美しく強く輝く光。光と秀。どちらの字にも合っている。

「じーちゃん、俺のこと褒めるの好きだよね。ゴギョーの時もそうだつたけど……。どうしたの？」

「儂みたいな古いぼれは、若いもんの成長が楽しいもんじや。とくに坊主みたいな、止まらないような奴には、邪魔をして、壁になりたくなる」

そんなものじやよ。そういう桑原のじーちゃんは、とてもとても楽しそうな顔をしていた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

【(このご老人が、僕達の名を受け継ぐ現代の本因坊)】

狡賢さをにじみ出させる二タリとした笑顔。百戦錬磨でありながら、その真つ正面か

らの強さを隠すような飄々とした態度。

虎次郎は、目の前に居る老人がただの囲碁好きの翁ではないことを見破つた。

【（老猾極まりない。見た目は河童、強さは鬼。あの、ぱそこんとやらで見た棋譜は、実際に素晴らしいものでした）】

すり減つた右手人差し指の爪と、中指の腹。あらゆる研鑽を積んできたのだろう。

【（あれほどの強さを、僕もヒカルも、この世で最も強いと信じる佐為よりも強いかもしれない棋力を身につけているヒカルが、自ら負けるとそう称した相手）】

誰よりも美しく力強い碁を見続けていた自信がある僕ですら、今のヒカルと佐為との力量の差には、ヒカルの方が上であるという考えが出てしまう。

【（なんとかして、佐為との連絡をつける手段を考えなければ。佐為の姿は見えど、声は聞こえず佐為からも聞こえてこない。佐為は、僕の存在に気づいていない。せめて文字でも書ければ……）】

文字。何かしら触れることが出来て、そして何かを書き込めば。跡を残すことが出来たら……。

生憎、ヒカルは今も、桑原殿と話し込んでいる。あかりちゃんはそれを真剣に聞いている。もちろん佐為や塔矢アキラも同じく。なら、多少動いても問題ない。

ここに入り口にいたあの茶色い髪の女性が、出てきて、此方に向かっているのを見て、

立ち位置を入れ替えるかのように受付に入る。

【（何か一つでも、神よ、この運命を紡いだ神よ……。どうか……）】

家の中でヒカルが触っているから分かる。現代の筆。ペンとやらを一つ一つ、とにかく触っていく。

【（なぜ！　なぜ、僕には何も触ることが出来ない！）】

結果は全て同じ。全てのペンが体を、手のひらを突き抜けるかのようにすり抜けていく。

【（卓上のペンは全て試した。床には何も落ちていない。どうすれば……。どうすれば、これは？）】

薄橙の筒には透明の蓋が嵌められており、胴の部分には、『毛筆筆ペン』と言う字。

【（こ、これが筆……なのですか）】

筆であれば持てるのでは無いか。という希望と、これでも駄目ならば。という不安。二つの感情が胸の中をぐるぐると書き混ぜるように表れる。

【（ええい！　さもあらばあれ！）】

目を閉じて、どうなつても良いと、恐る恐るといったような手を投げやりに勢いよく伸ばすと、

【（つ痛！）】

あるはずの無い痛みが、指先から、手のひら、肘、二の腕と通り過ぎ、反射的に手を退いてしまう。だが、それと同時に、喜びがこみ上げてくる。

【（よし！ これで、僕も、佐為と話せる）】



「今日はありがとうございました。いろいろと迷惑をかけてしまって……」

「いえいえ、良いのよ光秀君。アキラ君も良い刺激になつたみたいだし。桑原先生に聞いては、常連さん達が指導碁を打つて貰つてるし」

だから、何も気にしなくて良いと、受付の市河さんに優しく言われたので、俺とあかりは頭を下げる。

「当分こないと思いますが、また来ると思います」

「おい本因坊光秀！ 今度来たときは僕とちゃんと対局しろ！」

「別にフルネームで呼ばなくて良いよ。呼び辛いだろ？ 光秀で良い。それと、俺と打ちたかつたら、せめて塔矢名人との対局で石を一個減らしてから言え」

ぐぬぬと、腰の位置で握りしめた拳が、ワナワナと震え始めたのを見て、とつとどづらかることを決意する。ただ、もちろんその前に一つ。

「まあ、あかりにも勝てねえんじや、一生無理だけどな」

当然の如く何が無理かは伝えない。どうせあっちが勝手な理解をするだろう。置き

石を減らすこと。あかりに勝つこと。俺と対局すること。そして、俺に勝つこと。

「せいぜい頑張れよ」

【大人げないですよ？ ヒカル】

(今は子供だよ。虎次郎)

【それもそうでしたね。あ、あとで筆ペンとやらを買って貰つて良いですか？ もしかしたら、字が書けるかもしないので】

(わーったよ)

【何度言えれば理解するですか……。返事はしつかりとしなさい】

(はい)

「んじや、じーちゃん！ 先帰るから！」

「なに!? 儂ももう爺達の相手は疲れたわ。帰りたいんじやが……」

「あ、連絡先これだから、また今度、日本棋院のあそこにつれてつてよ」

押しつけるだけ押しつけた俺は、あかりの待つ受付へと小走りで逃げて行く。

「さよーならー」

「さ、さようなら」

俺に手を引かれて、あかり共々急いで囲碁サロンの扉から外に出る。お昼ご飯を駅に近いファストフード店で食べてから来たのだが、気がつくと、外の世界は真っ赤に染

まつていた。

「悪ガキいー！」

バタンっと扉を閉じると、もう囮碁なんて関係ない。

「やつぱり、最後まで河童なんだよな」

「ふふふ。楽しそうだね」

「まあな」

そういうって、俺はあかりに手を差し出した。分かると思うが、握れという意味。にこにこッと満面の笑みを浮かべたあかりが手を握ってくれたことを確認すると、そのまま歩き始める。

「今日会った塔矢アキラは、直ぐにでもプロになれるくらい強いんだ。まあ、俺の方が強いけどな」

繋がつておくべき人材であることに変わりない。それが、どんな関わりかたであれ。塔矢だけじゃ無い。一足早く、トップ棋士になつた緒方も、彼自身は飽くなき探究心と、情熱を持つていた。見た目はヤンキーでストーカーの気質があるけど。

塔矢アキラ。和谷、伊角さん。奈瀬、越智、本田。緒方さんについてに倉田さんも。誰しもが、戦いのなかで力を身につけた素晴らしい人たち。強さはどうであれ、尊敬する人って言うところには変わりない。

「取りあえず、ああいうやつと対局が出来るなら、積極的に持ち込んだ方が良いと思うぞ」

「うん！ 分かった。でも、ヒカルの方が強いなら、ヒカルといっぱい打つからね！」

はいはい。そうやって、好きにすればと言う態度を取った俺に、あかりはふて腐れる  
ように頬を膨らましていた。

## 第十四局

佐為に出会つて、囲碁教室に入つて、囲碁サロンに行つて、塔矢と出会つて。次に来るイベントは覚えている。子供囲碁大会。初めて、塔矢名人と出会つた日だ。

正直に言つて行きたくない。

あんなのただの黒歴史だ。子供達が必死になつてゐる対局に水を差すなんて。おかげで、ストーカーヤンキーにいじられるネタになつたんだから、本当に嫌になる。何か理由をつけて休みたいのだが、件の囲碁大会までは、残すところあと三日。

「やべえ。ほんとやべえよ……」

それほどまでに嫌だというのですか？　その、童たちの囲碁大会が。

先ほどまで真っ白だったノート。そこに次々と文字が記されていく。

「おい虎次郎。どんだけインクと紙の無駄遣いするんだよ。紙のスペースがないだろ？」

「仕方ないじゃないですか。これほどまでに、文字を書けることが楽しく、嬉しいことだなんて、僕は知らなかつたのです」

「まあ、今までの会話方法から考へると、とても良いことだとは思うけど、その筆ペンと

ノートを買つてるのは俺なんだからな?」

【分かってますよ。(ただ、問題があるとすれば、端から見たときにこの筆がひとりでに動いて居るよう見えてしまうと言うこと】

もうすぐに迫つた関門からどう逃げるかを考えるヒカル。そして、手に入れた手段をどう使うか考える虎次郎。

「どうしたもんかねえ……」

【どうしたものでしよう……】

「ちよつとヒカルー。桑原さんつていうお名前のおじいちゃんがヒカルに電話よ

えつ? 何で? と言う疑問と共に階段を下り、母さんから受話器を受け継いで電話に出る。

「もしもし? 桑原のじ一ちゃん?」

『おうおう、ちゃんと出おつたな。この前貰つた連絡先が合つておるかの確認と、三日後に棋院に来ないかと言う誘いの電話じや』

「ああ、そう言えば渡してたね。それで? なんで三日後?」

『昔塔矢の奴が言つておつたのを思い出してなあ。子どもの囲碁大会で口を挟んだ輩がおつたとかなんとか』

【そんなことをしたのですか】

(昔だよ昔。俺も若くてさあ……)

【今も十分若いですよ】

どうやら、桑原なりの気遣いだつたらしく、やつぱり妖怪には全てお見通しなのだと  
考えてしまう。

「それ、俺にはメリットがあるけど、じーちゃんにとつて利益あんの?」  
『ほお、ワシのことは信用されんのか。ワシにとつて良いことなど、お主と囲碁の話が出来ること以外になにがある』

「まあ、それもそうか」

自分たちは何処まで行つても、どんな年齢でも囲碁バカで、囲碁以外のことなんて考  
えても仕方が無いんだ。そう考えたら気が楽だ。

『そうじやそうじや、あの女の子……、あかりじやつたか?』

「合つてるけど、あかりがどうかした?」

『あの娘は連れてこんでええぞ。お主の先のことも話したいしのお』

俺は理解した。この話し合いの日が、進藤ヒカルと本因坊光秀が、棋士になるための  
重要な日になるということを。

なんせ相手は、俺のことを文字通り一番知つてゐる相手だ。

「分かった。一人だけで行くよ」

(虎次郎は打つてみたい？　じーちゃんと)

【その想いは確かにありますね。棋譜では分からぬこともありますし。ですが、佐為以外と打つたことがない僕が、今の本因坊と打つても……】

(囲碁打ちは、打ちたいときに打ちたい相手と打つんだよ。気にするな)

「じーちゃんじーちゃん！」

突然大声を出したことに驚いていたじーちゃんに心にも無い謝罪を伝えると、一二、三戦ぐらいしたいということを伝える。

だが、帰ってきたのは思つてもみない返答。想定済みだと言われてしまった。

『どうせ、お主がお主に憑いて居る者に持かけた。というオチじやろ？　読めて居る読めて居る』

【な、なんと申して居るのですか？】

(全部想定済みだつて。俺が持かけたのもバレてた。打てるぞ？　今現在で最強の棋士と)

『作戦会議は終わつたかのお？　それじゃあ待つてるぞ？　あ、場所はおぬしの大好きなあの場所で良いな？』

じーちゃんが言う場所なんて自宅か棋院のどつちかしか無い。それで俺の好きな場所。そんなもの、あの部屋以外に無い。本因坊秀策の棋譜が保管されていたあの部屋

だ。

「むしろ、あの部屋以外に何処でするんだよじーちゃん」

『ホツホツホ。小僧は自分の研究会もあそこでして居つたな。皆言つておつたぞ？　あの部屋だけ棋院の所有地じや無くて、お主の所有地じやとなあ。あの部屋の中にある棋譜は、棋院の従業員に聞くよりもお主に聞いた方が確実じやつた』

『そんなことまで言つてたのかよ……。絶対和谷と伊角さんだ。』

『けどあれは俺が主催した研究会じや無くて、俺がやつてた研究にあいつらが混ざつてきたんだよ。まあそんな話はいいや。了解。三日後に行くよ』

約束は出来た。自分の境遇と同じで、力を持つ大人と話をすると。そしてそれが自分の味方なんだ。

（あかりには何も言わなきや良いか。あの大会にしろそれじや無くともなんか誘われたら用事があるで）

【そうですね。僕がどうこう言うことでは無いですが、ヒカルのこれからを、先を見据えるのであれば、最優先のことですから】

ガチャンと受話器を置いた俺は、頬をバチンと叩いて気合いを入れる。これからどうすれば良いかなんて分からぬ。考えることなんて大の苦手だ。でも、夢はしつかりとある。

「ヒカル？　さつきのはどういった人なの？」

話が終わつたことに気づいて顔を除かせる母さんに俺は話しかける。

「そのことで話があるんだ。とても大事な——」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ヒカル！　今週の日曜なんだけさ、囲碁大会があるから一緒に行こうよ」

「ごめんあかり。俺その日用事があつて、母さんと一緒に出かけないといけないんだ。ほんとにごめん。今度埋め合わせするから」

翌日の金曜日。案の定俺はあかりに誘われた。元々用意していた言い訳を口にすれば、退いてくれるのは分かつているが、少し心苦しい。

ただ、この言い訳に嘘は一つも無い。日曜日。俺は母さんと二人で日本棋院に行くからだ。

あの電話のあと、俺は母さんに話した。自分の夢のこと。そのことで何が必要なのか。どういうことをどんな風にしていけばその夢に近づけるか。そして、そのためには何をして欲しいか。

「あかりが試合に出るなら良い経験になるな。楽しんで来いよ？　優勝はすると思うけど、応援してる」

「うん……。うん！　頑張つてくる。ちゃんとトロフィー見せるから楽しみにしていて

ね？」

一瞬だけ悲しそうな顔をしていたが、俺は気にせず右の拳を突き出す。常にあかりの隣で一緒に何かしてあげれるわけでは無い。特にこれがはそうだ。初めての大会で怖いことはあるだろうけど。

首を傾げて、どうすればいいのか分からぬといつた表情をするあかりを見て笑つてしまふ。

「何で笑うのさあ……」

「ちよつと面白かつたんだよ。気にすんな。そんなことより」

こういう時は拳を合わせれば良い。そう言つて俺は左手を使い、あかりの右手を握らすとそのまま俺の拳と合わせる。

「いつも対局してるのは誰だ？」

「ひ、ヒカル……」

「だろ？ 安心しろ。俺たちと同い年の中であかりより強い奴は俺と、塔矢ぐらいなんだ。他の奴等はあかりも弱い。それでも安心できないっていうなら、このグータッチを思い出せば良い。この感触を思い出せたらその拳に俺がいる」

——大丈夫。あかりには俺が着いている。

「例え俺の姿が無くても。例え俺が見えて無くてもだ。気楽に頑張れ」

さつきの悲しそうな顔はどこへやら。ギュッと両の手を握ったあかりはキリツとした表情に変わっていた。恐らく佐為がフォローしてくれたのだろう。

「因みにその用事つてお家の関係? ヒカルのお母さんと行くんでしょ?」

「いや、家つて言うよりは俺のことだよ。俺のしたいことの為に必要なこと。それを母さんに見せるんだ」

「かなり苦しいですが、嘘は言つてませんからこれ以上は言い方もありませんね】

(そうだな)

「一限目始めるわよ? 皆席についてー】

教室に入ってきた担任の声を聞いてクラスメイトたちがバタバタと忙しく動き始める。条件に出されたんだ。それに、虎次郎との約束もある。

当たり前のことが出来ないからこそ当たり前のことをする。俺は改めて誰に言われるも無く、小学生として、当たり前のことをやり始めた。

「日直、号令をお願い】

「起立】

俺は、先生の指示に従つて号令をかけた。

## 第十五局

「桑原のじーちゃん、いる?」

「ちょっとヒカル! 相手は目上の方」

「いえいえ、気にせんで下され。小さい子は元気が一番です。それが礼儀知らずでも、後々に良くなれば」

日本棋院内にある棋譜を保管するための資料室。かつてのヒカルが自分の城になる程までに入り浸り、多くの仲間と検討し過ごしたお気に入りの場所。

棋院自体には桑原が話を通していくくれていたらしく、すんなりと入れた。(一方的な)知り合いにも顔を合わせなかつたので、ことさら嬉しい気持ちで一杯になつてゐる。「今日はお話を聞いていただきありがとうございます。桑原さん」

「何もそんなかしこまらんで下さい。ヒカルくんの進路は、囲碁界の未来にも関わっていますから、遅かれ早かれ、親御さんとは話したかつた。こちらこそ、今日はありがとうございます」

真面目な対応をしている桑原にとても背中がむずむずと痒くなつてしまふ。

ただ、これから始まるのは進路相談。他の誰でもない『進藤ヒカル』が棋士になるた

めの、囲碁界最強の男とする三者面談。

(まさか、面談になるなんてな？ それも桑原のじーちゃんど)

【これも仕方ないことです。それに、囲碁に関して彼以上に頼れる人がいないのですから、使える手は全部使う。当然のことですよ】

三日前に桑原のじーちゃんから貰つた電話の後、俺は母さん。そして、たまたまメリビングにいた父の二人に、将来設計のことを伝えた。確りと、『囲碁打ちになりたい』と目を見てそう言いきつた。

「この子はなんでも興味を持つんですけど飽き癖があつて、私も知らない内に囲碁を始めるし、また何時やめるか……」

「母さん！ 僕が碁をやめるわけ無いよ!!」

「今は静かにしていなさい。話してるでしょ」

いつもみみたいに怒鳴りつけてこない。静かに怒られた。でも、不安があるのか、声が震えている。

「想像するに、突然ヒカルくんがプロ棋士になりたいとそう伝えたのでしよう？ そして、囲碁界のことを知らないからこそ、親として、確りとした場所に就職して欲しいと思つてる」

「そうなんです。でも、この子が初めて芯を持つてやりたいことを言つてくれたんです。

だから、応援してあげたい気持ちもある

親心は複雑ですなあ。と、クツクツ笑つてゐる桑原のじ一ちゃんは、手元に置いていた湯飲みを手に取り、少しだけ口に含んだ。

「ワシも、子や孫が碁打ちになりたいと申し出れば、頑なに反対していただしよう。囲碁なんものは生きもの水もの足が速い。自分の頭を雑巾のように絞りに絞つて一勝して、雀の涙程度の対局料を集める」

勝ち星という石をアゲハマに置いていかないといけない。そうやって、何度も何度も積み上げた結果がタイトル戦線に躍り出る存在になる。

対局料で金を稼げるのはタイトル予選やタイトル戦で勝てるようにならなければ無理だから。

「自分で言うのも恥ずかしいもんですが、ワシはこの囲碁界で一番強い。こんなジジイじゃが」

「ええ、昨日ヒカルから聞きました」

桑原のじ一ちゃんが言いたいことは単純だ。年寄りとして、若い子を育てたい。未来を背負つて立つ超新星を。

「ワシとしては、出来ることなら彼を今すぐにでも棋院に所属させて、ワシの門下で更に技術を磨かせてあげたい。古い先の短いワシの、我が儘のようなもんでな？」

「そ、それでも」

「ね、母さん？ 桑原のじーちゃんもこう言つてゐるんだからさ？」

「ヒカルよ、一流になりたければ、思いを伝えるだけじゃ足りんぞ？」

早く棋士になりたいと気持ちがはやっていたヒカルが、え？ と桑原の方へと顔を向ける。

「一流は常に実績を残す。それはつまり、手前に降り注がれる期待を身に受け、その重みを理解し、重圧をはねのけるという三つの行程を終えてこそ」

口先だけじや何も叶わん。何も手に入らん。

そう言つた桑原のじーちゃんは、少しばかり寂しそうな顔をしていた。

「ヒカルくんと幾つか対局してみて、この子は神に愛された子だと感じた。囲碁を愛し、囲碁に愛されると感じる程です」

でも、そんなのつて……。そう呟くように母は頭を抱える。頭の中に浮かんでいるのは、早すぎるという言葉。

「ヒカルが笑顔になつてゐるのを知つてゐるんです。幼馴染みや義父と囲碁をしているとき、とてもイキイキしていることを知つてゐるんです」

桑原のじーちゃんから電話を受けたとき、ヒカルは母に、そして父に碁打ちになると伝えた。そして、どういうプランで碁の道に入るのかも教えた。

8月にある外来試験、9月にある合同試験、10月にある本試験を受け、中学一年生の時点ではプロになる。そのまま職を手にするため、高校にも通う気は無いと。

「親としては、もっと色々と経験して欲しいでしょ。高校にも入り友と遊び多くのことを吸収する。その時間を囮碁に使わせていいのか。そういうふた考え方を誰も間違つとは言えん。そもそも、親心に正解なんぞあつてたまるか。というもんです」

現に、院生の親であつてもそう言う親は多い。囮碁という得体の知れない世界に対し、応援はしても進んで勧める親はそういうない。

「普通に高校に行つて、普通に大学を出て、普通に就職する。それがこの子には合わないんでしようか……」

「お母さん。合う合わないは親が決めるものじゃありませんよ。子ども自ら、ヒカル君自身が決めるものです。親が出来るのは、納得するまでその道を進めと背中を押し、そして疲れたときに縋れるよう笑顔で後ろにいること。ただそれだけです」

それは、師匠としても変わらない。どんな関係性でも、親と子に似た関係を持てば、次代に繋がるものは全て宝物に見えてくる。だからこそ、木々が生い茂った後に枯れ葉が落ちるように、親は立ち上がりと根を伸ばしてあげなければならぬ。

「母さん」

俺の声に反応した母は、酷く辛そうな顔をしていた。それもまた仕方ないと思つてい

る自分がいる。

不出来な息子だと思う。中学に上がる時期にいきなり囲碁を打つようになり、中学の途中から相談も何もせずにきなりプロになつて。終いには一度囲碁から離れた。「今までの俺とは全然似つかないと思う。今頃になつて宿題はやるようになつたし、授業中に悪ふざけもしなくなつた。サッカーなんかより、囲碁の方が楽しく見えて、それしか考えてない」

中学生の間だけで良いから、プロの世界に居させて欲しい。

重苦しく静かな空間に風穴を開けるには十分すぎる一手だと思う。

「中学に上がればプロになる。それで一年。目の前のじじいの目の前に座る場所を奪う準備を整える。二年で結果を揃える。中三の高校入試までに本因坊のタイトルを取りなかつたら、問答無用でやめるよ」

それが俺の覚悟。これが俺に打てる最高の一手。

進藤ヒカルとして、本因坊光秀としての意志。

「私にはよく分からぬけど、とても難しいことなんじやないの？」

「ファツファツファツ。儂は今が最盛期じやぞ？ その儂から本因坊を取る？ 出来る

もんならやつてみいクソ餓鬼」

「やるよ。俺は神の一手を見つけ出す。そして遠い過去と未来を繋げる。二人居る囲碁

の神様に代わって」

【まつたく……。君という人は】

なにが愉快なのか分からぬが、とても嬉しそうに笑いながら茶を啜る桑原は俺の頭を撫でる。

「ヒカル。少し席を外してくれるか？ すこし、お母さんと話してみたい。それに、子どもが居ると話せんこともある」

【ここから先は桑原のじ一ちゃんのターンになる。言外にそう言われ、共犯者がニヤリと笑う。俺は大人しく頷くと、背を向けて部屋から出た。】



(ここからはしんどくなるな)

【まあ、本人を目の前にして啖呵を切ったんだからそうなるでしょう】

俺が前を過ごしたときによく居た場所。水槽に入れられた熱帯魚？ を見つめている虎次郎と共に二人の話し合いが終わるのを待っていた。

【3年間で本因坊の名を手に入れる。出来るのですか？】

(さつきも言つたけど、出来る出来ないじゃないよ虎次郎。やるんだ。俺は)

虎次郎とは違い、見慣れていないはずの見慣れた水槽から視線を移し、目に入れるのは物販ブースの扇子たち。

(あの舞扇子、こんな時からあつたんだ……)

【舞扇子？ ですか？】

(あの手前にある紐が付いた舞扇子)

【同じものを持っていたのですか？】

触つて良いかどうかだけ店員に聞いてから許可を取り、懐かしい相棒に手を添える。店員は、プロ棋士に憧れた子どもだと勘違いして微笑んでいるが違う。

(流石相棒。やつぱりしつくり来る)

【ほう……。言うだけのことはありますね】

両手で持つてから扇子を広げる。右手は要に、左手は親骨に添えて。

先ずは中骨を三つ分奥へと広げ、次に残りを手前に引く。佐為が無意識ながらよくやつていた動きをそのまま真似てみる。

「ははっ」

懐かしい絵にも付い笑いがこみ上げてくる。

違うはずなのに同じ。同じはずなのに違う。こんな時期に俺は棋院にいなかつた。桑原のじ一ちゃんと会つていなかつた。母さんに棋士になりたいことを相談しなかつた。この扇子を持つていなかつた。何より、虎次郎と一緒に居なかつた。

「お扇子を持つのが上手ね。何かしてるの？」

「えつ？　あ、知り合いがよく持つててそれの真似してただけ」

不意にかけられた声にも驚きながら俺は佐為のことを思い出す。託されたんだ。佐為の囮碁を、思いを、過去を。扇子という形に乗せて。

「ありがとうございました」

そういうえば、佐為のヤツたまに扇子持つて踊つてたな……。とかつての面影を思い出し、何も持つていらない右手を回してみる。

「どうしました？」

（いや、日本舞踊つて分かる？）

【残念ながら】

そりやそうだ。と再び水槽の方へと足を向かわせる。ちよろつと日舞の動画でも見るか。なんて頭の中で考えた俺は、また背中を壁に預けた。

## 第十六局

「あ、桑原のじーちゃん」

エレベーターの扉が開いて出てきたのは、見慣れていた禿頭の爺。手持ち無沙汰に耐えきれずに俺は声をかけた。

周囲をキヨロキヨロと見て俺を探していたのか、声を反応すると直ぐこちらを向き、手をクイクイと曲げて呼びつける。どうせ、若いヤツが動けとか考えているんだろう。「終わつたぞ。とりあえず上に行こう」

「うん」

鶏の後ろを歩くヒヨコのように引つ付いてエレベーターに入り、資料室がある階のボタンを押す。暖色の光を灯した階数ボタンを眺めているうちにエレベーターは引つ張り上げられ、目的地に着いた。

「ヒカル……」

母である美津子は既に資料室を出ており、俺のこと待つていた。

その声は静かで、でもどこか憑き物が取れたようにスッキリとした顔をしている。どうやらじーちゃんが上手くやつてくれていたようだ。

「とりあえず、お家に帰りましょう。色々、三人で話しましょう。」

【前向きに考えてくれそうですよ?】

(よかつた。流石じ一ちゃんだ)

「うん」

差し出された母の手を、俺は恐る恐る握る。恥ずかしい気持ちが心の中を埋め尽くす中で、努めて子どもらしく母に従つてみた。

そうすれば、母はホツとした表情で頷いた。

「何かあればまた僕に連絡を入れて下さい。なんでも相談に乗ります」

「ありがとうございます。桑原さん」

きつちりと腰を曲げて礼を述べる母を見て、慌てて俺も頭を下げれば、少し後ろで虎次郎がふふっと小さく笑う。

(あーもう!! どうせ俺は子どもですよ!!)

伊角さんや和谷にも、塔矢にもずっと子どもっぽいと言われ続けたのだ。今更どうでもよい。

【何を言つて いるんですか。親にとつて子どもは何時までも子どもです。親は、たとえ子どもが元服しようと嫁を貰おうと孫が出来ようと心配するものです】

頼れるものがあるなら全て使えば良い。その分、いつか少しだけ色を付けて返して上

げなさい。どこか嬉しそうな虎次郎を見てしまえば、俺の中での大人というイメージが崩れていく。

良くも悪くも佐為は兄弟のような人で有り憧れ。だが、虎次郎は人としてしつかりと自分を見ててくれる。

(帰つたら一局打つ? 兄さん)

【え? 兄さん?】

他に誰がいるんだと抗議の声を上げれば、虎次郎は更に驚いた顔をする。

藤原佐為と共に碁を打つてゐる。佐為から碁という者を心に、体に取り入れた人物は一纏めに藤原門下だ。なら、虎次郎は自分にとつて兄弟子。彼から見れば、

【弟弟子というわけですね。ハハツ、良いでしよう】

未來の本因坊にどれだけ敵うのか楽しみだと、やはり碁のことが関わると楽しそうになつてしまふのは師匠譲りだろうか。

まあ、碁を打つていて楽しくないのは苦しいな。なんて思つてしまふ俺も、なかなかなもんなんだろうな。

(あ、虎次郎と同じちゃんが対局してない……)

【忘れておりました……。これは不覚】



さて、家に着いたのは良い。恐らく、あかりの囲碁大会も終わつた頃だろう。連絡が来ないと言うことは大会で上手くいかなかつたか、打つていないか。  
（俺みたく口出しするとは思えないんだけどなあ……）

【そういえば言つてましたね】

まだ、囲碁の囲の字に触れただけの何も知らなかつた時の話だ。佐為という存在にならず、口に出して会話することもあつた。

思い出せば懐かしく、当時のあの名も知らぬ二人には申し訳ないという心でいっぱいになつてしまふ。

（まあ、それもそれで重要だけど、長考か？）

祖父に買つたことで手に入れた足の着いていないハギ盤というタイプの碁盤を挟み、俺と虎次郎は約束通り対局を行つていた。

父が帰つて来るなり、今日桑原のじーちゃんと話した内容のことを母が話していたので、子どもが居て良い状況じやないなど悟つた故、今こうしている。

（思つてたよりも強いぜ？ 虎次郎）

【本当ですか？ 佐為が打つていたのを見よう見まねでしているだけですよ？】

(それでもだよ)

実力はある。恐らくは佐為の相手もしていたのだろう。というしつかりとした打ち筋で有り、性格が出ているのか、綺麗な川が上流から意志を運んで河川をちょっとずつ作っていくような、落ち着いた守りの体勢を築いて行っている。

【それではこちらに】

初対局と言うことも有り、俺も虎次郎も様子見の手が多い中で、虎次郎が指す場所は、佐為の綺麗な棋風を保ちながら、少しばかり違う場所。

(弟子つて言うのは、教わる人が同じでも結構棋風が変わるんだな。佐為みたいな綺麗な攻め碁でも、俺みたいな新しい物好きでもないし)

【それはもちろん変わるでしょう。同じ本因坊の名を持つていても、受けきる碁を打つ秀和様や、道策様のような素晴らしい碁打ちとは違いますから】

そんなことを言われれば、その素晴らしい碁打ちの棋譜も見てみたくなる。

「そういえば、前は佐為の棋譜しか見てなかつたな……。いや、一応は見てたけど……」

【棋譜ですか?】

(今日行つた棋院の資料室のことだよ。佐為が居なくなつて腐つたときに、佐為の姿を探して広島行つたり、秀策の棋譜見まくつたり。意味なかつたけど)

それでも、ネットの海にしか生きられなかつた姿なき佐為の背中を、自分の碁から感

じられるのは嬉しかった。本因坊を取れば佐為に認めて貰えるだなんて思つていたが。

「おいしょつと」

パチンと碁石を碁盤に置き、黒石を二つアゲハマに置く。うむ。と顎に手を添えて考え込む。

「広く守る視野は良いけど、捨てる場所と取る場所のメリハリを付けなきや漬け込まれる」

悩んだ末に虎次郎が打ち込んだ一手を俺はノータイムで打ち返す。思考の速さは折り紙付き。おかげで深さがないと言われ続けているが。

「ヒカル。少し良いか?」

ドアの向こう。対局する前はリビングにいたはずの父親の声がノックと共に聞こえてきた。どうしたんだろうとドアノブを開き部屋の中へと招き入れる。

「お前の部屋なんて何時ぶりだろうか」

そう言つて部屋の中を見る父親の目線を追いかけて見れば、余り使われている様子のない勉強机。ある程度は整理されているものの出しつぱになつているシャツなりズボン。ベッドの掛け布団はめくれており、床には囲碁の本やら棋譜やらが散乱している。

お世辞にも綺麗とは言えない。そんな部屋の中を見ていた父、正夫は、部屋の真ん中に置かれていた碁盤を目にしていた。

「勉強中か？」

「うん。まあね」

先ほどまで打っていた碁盤は片づけられて居らず、黒と白が入り交じった状態で放置されたまま。

「昔親父が言つてたよ。碁が強い奴はたくさん勉強するつて。俺にはよく分からんが棋譜とやらを並べたり詰碁か何かするんだって」

「これもか？」と言外に尋ねる父親に俺は自信を持つて違うと伝えた。

「囲碁は確かに勝負するから勝ちと負けがある。けど、そもそも二人居ないと対局は出来ないんだ。だから俺は、一度しか出来ないことを全力を注ぎ込む」

母さんなら頭ごなしに文句を言つて聞き入れてくれない。そんなこと分かつているが、父親である正夫がじつと俺の目を見続けて話を聞いてくる。  
(やつぱり、親つて凄えな)

「ええ。そうですね」

「一度しか作れない世界を碁盤の中で作るんだ。勝ち負けで捉える人は練習だし、お金が欲しいつて思つてる人は仕事。でも俺の場合は……。遊びかな？」

だつて囲碁打つたり、棋譜を見たり、検討したり。真剣にしててもそれは楽しい。楽しいと思つて楽しいことをし続けていたら、お金は入つてくるしタイトルだつて手に入

る。

「楽しいと思えることに真剣で眞面目にいられるのってとつても凄えなつて思う。だから、楽しいことを全力で楽しめてるから、これは遊び」

「ははは。謎な理論だな」

「けど、まあいいや。つと手を一回鳴らした正夫は、俺の頭を撫でてきた。

「まだこんな小さいのに、いつちよ前に大人になる。前途多難だぞ？ 未成年の社会人つて言うのは」

「うん。それでもだよ」

「子どもの意志や意地、信念なんて関係なく親心つてのは心配に振り切つてるんだ。分かるか？」

「もちろん」

「プロ入りする条件がある。ちゃんと聞いてくれるか？」

撫でられぐしやぐしやになつてしまつた髪の毛は、父の手で綺麗に整えられた。そして、その大きな手は頭から流れるように肩まで移る。

ポンと一つ叩かれたときの顔はとても良い笑顔をしている。

「ははは。もちろん」

俺の返答を聞くと膝を曲げ目線を合わせる。そんな父の姿に思わず姿勢が整えられ

た。

「母さんから聞いたよ。一番速くともプロになれるのは来年の夏。つまりは中学一年生」

タイトル戦に出られるようになるにはどんなに速くても更に一年。つまりは中学二年生。挑戦者としてタイトルホルダーと戦うには更に次年度。つまりは中学三年生になる。

「タイトルにはならない大会もあるってのも調べてみたからな。先ずはなんだつけ、若鯉戦?」

「若獅子戦! 早速間違えないで!!」

すまんすまんと謝られては威厳も雰囲気も何も無くなつてしまふ。ただ、家族の言いたいことは伝わつた。

「囲碁に集中できる中学3年間でノンタイトル戦で勝つて来いつてこと?」

「それだけじゃない。中学生としての3年間で挑戦手合の座に座つてみろ」

桑原さん? がお前を凄いって言うもんだから、これくらいはしてみろ。と挑発のような発言。

「良いぜ、もちろんやつてやる。安心してよ父さん」

三年後は俺、本因坊だから。

自信満々に両手を後頭部で組みながらそんなことを宣う。もちろん慢心はない。俺よりも塔矢名人の方が強いだろうし、一柳先生や座間先生の方が、桑原のじーちゃんの方が強いだろう。

緒方さんや倉田さんなんかよりかは強いだろうけど。

「そうか。分かった」

将来どうするかは中三になる頃に話し合おう。宿題だけはしとけよ? と、机を指した父にへえ~いと気の抜けた返事だけ返すと、正夫は部屋から出て行つた。

【何度言つたら分かるのですかヒカル。返事はち】

(親が理解してくれるつて……。こんなに嬉しいんだな。虎次郎)

同じ道を進んでいても、アプローチが違うから過程が変わるのは当然のこと。本因坊光秀という名を名乗つたときも、あかりをあの碁会所につれて行つたときも、俺に虎次郎が取り憑いたときから全てが変わると思つていた。

(全部、ぐちやぐちやに搔き回して遊んで、全部違うから、端から違うから関係ないよね

?)

やりたいことをどことんやりたいだけ。自分の心情のままに。

【ええ。囲碁を知れば知るほど忘れるものです。始めは単純に、自分の打ちたいところに打つ。好きなようにあなたの石を打てば良いんですよ?】

(だな)

継続打とーぜ！ と元気よく碁盤の前に座つたヒカルに虎次郎は優しく笑う。

【この対局が終わればちゃんと寝てくださいよ？】

聞く様子もなく両手を広げ、早く打てよと促してくるヒカルに、虎次郎はやれやれと頭を振ると、諦めたように「8の十四」と攻めに入る起点とするための場所を指定した。